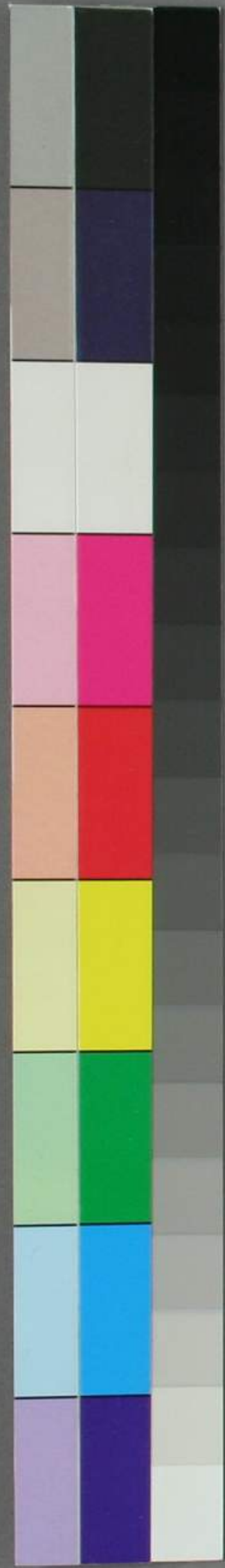


蘭使日本紀行

五

ル 3  
1138  
5





門 3  
號 1138  
卷 5



法事

此者ハ。サナクモ二十ジユカリテシニ下ラス下  
 等ノ僧ハ。ケ額ヲ受ク。一ジユカリドハ我金一圓ト  
二十三錢ハ重ユ  
 朋友及僧徒退散スル片極ニ從事スル人及他ノ  
 要務ニ關涉スル者ニ食事ヲ供ス。此人火勢ヲ見  
 テ喜フ一シトス翌日子弟姪及姪朋友此焚所ニ  
 来リ骨骸齒ヲ拾収シ鍍金セル壺ニ納レ家ニ携  
 ヒ帰り衣ヲ以テ之ヲ被ヒ室内ニ置ク  
 坊主再ヒ来テ法事ヲ執行ス七日毎ニ及復ス是  
 ニ於テ遺骨ヲ土中ニ埋メ或ハ四角ナル石ヲ建  
 テ其人曾テ信仰スル所ノ佛名ヲ刻ス爾後子弟



ハ日々之ニ參詣スルナリ。香花ヲ捧ケ。温飲。盛膳  
 ヲ地上ニ置キ。死者ノ心カヲ強壯ニスルトス。  
 然レハ此ノ如キ葬禮ヲ行フニハ。三チジユカ  
 テレ以上ヲ費ヤスヘキナリ。而シテ尋常紳士ハ更  
 ニ年々法事ヲ執行スルニ。二三百ジユカ  
 費ヤス。之ヲ盆ト称ス。各家燈ヲ掲ケ。墓所廟堂ヲ粧飾ス。無致  
 ノ人員市外ニ出ラ。食物ヲ盃ニ盛り。靈魂ヲ迎ヘ  
 テ我家ニ導ク。但シ此法事ヲ行フ前ニ。靈魂ハ既  
 ニ遙カニ天ニ上レリトスル所ナリ。  
 更ニ日本人骨骸ヲ埋ムル後ノ所業ヲ説クヘシ。

則チ嚴格ニ喪ニ居ル。一二年諸般ノ遊樂ヲ廢シ。  
 衣服モ哀傷ノ状ヲ呈シ。頭上ニ帽ヲ戴ク。上邊ハ  
 扁ニノ前ハ角ナリ。後ニハ廣キ絹アリテ。壑ヲ腰  
 ニ至ル。外套ハ非常ニ濁シ。胸上ニテ相交又ス。常  
 ニ手ヲ袖中ニ刺ス。此外套ハ卷キ揚クル。ナク  
 敬褶スル。ナク。透孔アル。勿ルヘシ。廣キ帶ヲ  
 纏フニ。西ニシテ締フ。外套下ニ袴ノ下邊。恰モ囊  
 ノ如クニ。足ニ至ル。衣服ハ總テ灰色ニ。漂白  
 セサル。麻布ニ成ル。  
 此ノ如キ埋葬法及法事ハ。決シテ貧人ニハ能ク



(元)

サル所ナリ貧人ハ一僧ヲ招クヲ得ス蓋シ謝金  
 ヲ辨セサレハナリ死者ノ靈ヲ保存スルノ注意  
 ヲ缺ク就中此輩ニハ魂魄不死ノ説ヲ或ハ竊カ  
 ニ或ハ公然トノ非毀スル者アレハナリ貧民ノ  
 屍體ハ日本ニハ貧民多シ是人負夥多ニノ<sup>給科</sup>牙費  
 ヲ得ルノ僅クナルニ由ル夜中或ハ不時ニ彼此  
 近傍ニアル糞壺ニ投スルナリ  
 阿蘭使節江戸ニテノ談緒ヲ更ニ緬クハ日光<sup>將軍</sup>  
 ノ廟所ニ參詣スルノ機會ヲ得ス抑モ日光廟所  
 ノ結構ナルハ諸寺ニ冠タル所ナリ東印土商

會ヨリ日本<sup>將軍</sup>ニ獻スル所上ニ記スルカ如ク鑄  
 銅<sup>燈籠</sup>ヲ阿蘭ヨリ日本ニ遠路ヲ隔テ贈ル所ナリ  
 フリシウス氏及ブルークホルスト氏江戸ヨリ  
 長崎ノ歸途ニ就ケリ<sup>慶安三年</sup>千六百五十年四月十六日  
 ナリ則チ品川六卿川崎神奈川程ケ谷戸塚ヲ過  
 ク途次有名ナル猿寺ニ至レリ其建築ノ壯大ナ  
 ル一其信佛ノ異容ナル一世界各國比スヘキ也  
 爰ニ狡獪ナル獸ヲ置ク末世ニ遺ス猿ハ他ノ道  
 理ヲ解セサレ獸類トハ同一視ス可ラサルハ疑  
 ヲ容レサル所ナリ舊時ノ<sup>希</sup>及羅旬記者



ノ説ニテハ猿及牛ヲ神ト為シ奉スル意ハ一ハ  
生活セル黒牛ニテ頭上及背ニ白斑アリ且多毛  
ナリ此神ハ<sup>泥</sup>エジプト<sup>日土</sup>祭事ニ定時ニ使役スレハ  
長生シ得ス當時一日使役セラルレハ其牛又ピセ  
名ク神聖ノ湖水ヲ飲ム猿死スレハ<sup>泥</sup>エジプト<sup>日土</sup>人  
ハ喪ニ居ル老若共ニ猿ニ跨リ胸ヲ<sup>お</sup>キ毛及衣  
ヲ裂ク若シ他所ニ於テ新猿出ルアレハ全國攀  
テ歡喜ス然レモ答辭ヲ為サハルアボロデビ  
キユスユビテルドドナラヌアムモンオツトロ  
ボニウスノ魔談ノ如クナラス或人ヨリ捧クル

ミ

ノ食物ヲ食スル片ハ無難ナルヲ徴ス若シ之ヲ  
投擲スル片ハ不安ヲ徴スルナリ故ニ<sup>カ</sup>サル  
<sup>日</sup>耳曼帝<sup>マニキユス</sup>捧クル所ノ食物ヲ食セサル片ハ  
其速カニ零落スルヲ報知スルナリ  
オシリスハ灰色牛ニノ首ニ斑アリ其足ニ目ノ  
アルシケフテ<sup>王ノ持ッ</sup>ヲ附ス以テ威權ト智  
識トヲ具スルノ徴トス舊時ノ<sup>泥</sup>エジプト<sup>日土</sup>王ハオ  
シリスノ墓ニ活人ヲ牲ト為セリ但シ其後此殘  
酷ナル所業ハ廢セリ又赤鸞色ノ牛ハ同属ナリ  
トス蓋シテ<sup>ボ</sup>レ<sup>ス</sup>ト大ニ同シケレハナリ之



ヲオシリスニ牲ト為ス

余茲ニビリニウス氏ノ語ヲ掲クヘシ曰ク<sup>泥</sup>予

カ<sup>日</sup>上ニテハ牛ヲ奉シテ神トス之ヲアピスト称

スニ寺アリ其一ニ詣スレハ幸福ヲ得ヘク他ニ

至レハ悲哀スヘキ前徴ナリ評議役ノ手ヨリ食

物ヲ取ルニ因テ其問ニ答フルナリ<sup>カ</sup>イナルス

日<sup>日</sup>耳<sup>耳</sup>曼<sup>曼</sup>帝<sup>帝</sup>ニキ<sup>キ</sup>マ<sup>マ</sup>ニ<sup>ニ</sup>キ<sup>キ</sup>マ<sup>マ</sup>ノ手ヲ嫌フ<sup>嫌</sup>ハ遠カラスノ死ス

ルナリ又尊敬シテ歌唱スルニ方テ猿ノ隠伏ス

ル<sup>伴</sup>ナリ又多子ヲ<sup>伴</sup>テ出現スル<sup>伴</sup>ナリ是意

ヲ領シ命スル所アルニ似タリ

キ<sup>希</sup>リ<sup>希</sup>ニ<sup>希</sup>記者<sup>希</sup>スト<sup>希</sup>ラ<sup>希</sup>ボ<sup>希</sup>氏<sup>希</sup>曰ク<sup>希</sup>ヘリス<sup>希</sup>ポリ<sup>希</sup>タ<sup>希</sup>リ

ンセ地方ニハ高堤上ニ日夕市アリ日及オスセ

ムネウシスノ宮殿アリ其中畜獸ヲ飼フノ小屋

アリヘリオボリク<sup>シ</sup>人ハ之ヲ神トスルハ猶

ノムボテ<sup>ル</sup>スニ於ケル猿ノ如シ

ヘルド<sup>チ</sup>ユス<sup>氏</sup>氏<sup>氏</sup>早<sup>泥</sup>シ<sup>日</sup>バ<sup>土</sup>ト<sup>土</sup>人ヲ記ス曰ク猫ヲ奉

シテ神ト為スト室内ニ塩ヲ撒スビユバ<sup>ス</sup>チ<sup>ス</sup>

ヲ送ル後立派ナル敬禮ヲ行フ此安全ナル市ニ

埋ノラルヲ<sup>求</sup>ムルナリ之ヲ証スルハ<sup>シ</sup>セ<sup>ロ</sup>氏

テオ<sup>ドリ</sup>ユス<sup>シ</sup>キ<sup>ユ</sup>リ<sup>ユ</sup>ス<sup>氏</sup>氏<sup>氏</sup>ブリ<sup>ユ</sup>タル<sup>キ</sup>ユス<sup>氏</sup>氏<sup>氏</sup>及



ユヘナリス氏ナリ

此事ニ就テセレノレスロマニユス則チ其名不  
詳ノ人曰フアリ注目スヘシ曰ク泥ジト人  
ハアビスト名クル牛ニ神事シ或野牛或ハ猫或  
ハ蛇ヲ喰フノ鳥ヲ奉事シ或ハ魚等又他ノ無数  
品ヲ奉ス又余其名ヲ明言スルヲ耻ル者ヲ神トス  
クレノンスマアレキサンドリニユス氏曰クサイ  
タ人及テバーネル人ハ羊ニ又リコボリターネ  
ル人ハ狼ニ奉事スレオポリス人ハ獅子ヲ四足  
獸中ノ王トス故ニ波斯亞人ハミタラ佛ニ獅子

頭ヲ画クノ日ヲ現ス

是ニハブリユクルキユス獅子ヲ日ニ加フルノ義ヲ  
説明スルアリ則チ獅子ハ曲午獸中ノ最ニノ一  
子ヲ生ムナリ又瞳眠極テ短カシ瞳中尚眼光ア  
リ又レオンチーネルスニ據レハ太陽天宮ノ獅  
子ヲ過クレハ井及澤ニ満水アルヲ見ル  
ストラボス氏曰クモンテシルス人ハ山羊及  
野牛ヲ神ナリト尊奉スエリアニユス氏曰クコ  
ヒラーテシハ何故ニ截リタル野牛ヲ食スルヤ  
而ノ尚野羊ニ神事スイスシ神ヲ敬禮シテ慰愉



スル為ナリ然レ他ノ<sup>泥</sup>平<sup>日土</sup>シバト人ハ野牛ヲ神  
以下ニ置クアリジオドリユスシキユビユスニ  
據レハ蓋シ陰莖ヲ具スレハナリ故ニ<sup>希</sup>ギ<sup>臍</sup>リシ  
人及羅甸人ハ此不都合ナルブリアヒユス神ヲ  
取ラス抑モ生殖ハ此陰莖ニ出ル所ナリ野牛ハ  
他獸ニ比スレハ最大ナル陰莖ヲ具スルカ故ニ  
之ヲ神ト為スノ象アリトスルナリ

ヘロドチユスハノンデシールスヲ評シテ曰ク  
此輩ハ盛ニ山羊ヲ飼養スル人死スレハ衆人皆  
喪ニ居ル蓋シ元素山羊ハ總テ神事スル所ナレ  
ハナリ

又既日土人及希臘人ハバント称スル佛ヲ画ク  
ニ其面容及足ハ必ラス山羊ニ擬ス而シテ他佛ニ  
同シトスヘロドチユス又曰クソンデシール婦  
女ハ之ヲ野牛ト同一視ス故ニ野牛ト接近スレ  
ハ神精ヲ交テ妊孕ストヌアトリヒラシハ有名  
ナルストラボ氏ノ保証ニ據テウユセルト麓  
トヨリ生スル子ヲ神ト為スブリユタルキユス氏ハ  
此卑賤物ヲ造物主ナリトスルノ理ハ此物新月  
ニ方テ麓崩ヨリ生シ減月ニ方テ其肝復タ消滅



スレハナリトス

印土胤ハラトナシ及イリテア則チリエシナノ神  
事スル所ナリエリアニユスノ説ニテハ印土胤  
ト蜈蚣及鱷魚ト相争フ而ノ既日土人ハ大ニ此  
ニ物ヲ忌ミ専ラ胤ヲ神トナシ尊奉スルナリ蓋  
シ胤ノ能ク此ニ物ヲ殺スヲ以テナリ然レ既  
日土人皆悉ク印土胤ヲ尊奉スルニアラヌ或ハ  
却テ鱷魚ヲ尊テ胤ヲ卑シム者アリ是胤ノ鱷魚  
ノ卵ヲ破碎シ或ハ之ヲ殺セハナリ則チ鱷魚腹  
ヲ負テ口ヲ開クトアレハ胤其口ヨリ腹ニ入り

又之ヲ穿テ獲ヒ体外ニ出ルトアリ故ニ鱷魚ヲ  
愛スル者ハ胤惡シ胤ヲ愛スル者ハ鱷魚ヲ忌ム  
是既日土人相分黨スル所以ナリ

ストラポノ外シセロジオドリユスシキユリユ  
スユヘナリスプリユタルキユス及アリアニユ  
ス共ニ証スルトアリオムビチセ既日土人ハ鱷  
魚ヲ尊奉スルト猶希臘人及羅甸人ノオリム  
セ神ヲ大ニ卑下スルカ如シ然レモアボルロレ  
ボリチセ既日土人ハ鱷魚ヲ罵詈ス蓋シテトボ  
ノオシリスノ為ニ殺サレタル中ニ鱷魚ノ形ヲ



取リタルト。又プサムノ一ミチユスドクトル及  
死日土ノ極テ正實ナル王モ鱷魚ノ為ニ吞マレ  
タル一アレハナリ

ストラボ又曰クセーレンネンノ一民グセーレン  
ン氏及死日土ノテンテリーラン氏ハ共ニ怜悧  
ニノ奇キアリ甲ハ蝮蛇ヲ乙ハ鱷魚ヲ自在ニ使  
役ステンテリーラン氏久時地ニ伏シテ水中ノ  
鱷魚ヲ注視シ而ノ容易ニ能ク之ヲ殺スナリ是  
ニ於テ羅馬ニテ曾テ一觀場ヲ開キ水中ニテ鱷  
魚ヲ捕ヒ之ヲ地上ニ出シ衆人ノ眼前ニ明示シ

而ノ復ヒ之ヲ地中ニ放チシ一アリ

ストラボノ考案ニハ往時アルシヌーニ一地アリ  
鱷魚街ト名ク蓋シ僧徒アリ此怪物ニ餅糕肉  
及酒ヲ薦メ之ヲ湖水ニ投シ以テ牲トセリ  
マキスミユスチリウスノ説ヲ掲ケテ以テ一案  
ニ供フ曾テ一死日土人アリ鱷魚ノ子ヲ養フ故  
ニ死日土人ハ之ヲ神聖ナリトシ日々衆多ノ人  
參詣敬事シ謹テ食物ヲ進ム此人此鱷魚ト同年  
ノ一子ヲ育ス幼時相共ニ親睦遊嬉ス然ルニ成  
育スルニ隨テ鱷魚ハ多カトナリ卒然其子ヲ吞



③  
 之殺セリ其母悲哀シ且大ニ驚駭セリ蓋シ其子  
 ナ以テ神聖ナリト自負セシ者此災ニ罹リタレハナリ  
 希臘及羅甸記者ノ基督前後ニ存生セシ者ノ説ヲ以  
 テスルニ尋常諸佛ノ外獸類ヲ尊奉スルハ極テ古代ヨ  
 リスル所ナルヲ知ルニ就中猿ヲ尊奉スルハ絶テ他獸ノ  
 比ニ非サルナリ

戸塚ヲ距ル一遠カラスノ荷蘭使節フリシウス氏及ブル  
 クホルスト氏此驛ヲ過テ長崎へ赴クハ千六百五十年  
 四月十八日ナリ猿寺ニ詣セリ是日本ニ於テ有名ナル寺ナ  
 リ其建築精巧巨額ヲ費ヤス所ナルニ中堂ニ高卓アリ下脚

③  
 ハ長サ人ノ半身許ニノ高ク四角上下ニ鏝リク  
 ル縁アリ平ナルニ層ノ臺アリ第三ノ最下層上  
 ニアリ頂上ニハ三重ノ縁ニテ鏝リ四邊漸次ニ  
 挺出シ下層ヨリハ大ナリ卓面ハ肖像ニテ鏝レ  
 リ下卓脚ノ第一面ニ大ナル銅鈕ヲ置ク一僧ア  
 リ其傍ニ立テ杖ニテ頻ニ之ヲ強打ス蓋シ參詣  
 人ヲシテ此音ヲ聽テ信心ノ念ヲ深カラシムル  
 為ナリ參詣人ハ拜シテ臂ト頭トヲ地上ニ接ス  
 堂内ノ諸方ニハ弓狀ヲ為シテ壁ニ墾ス此弓狀  
 ニハ活猿充滿ス是日本人ノ大ニ尊崇スル所ナ



リ此弓状大ニノ壁外ニ挺出ス其上面ハ阜ノ如  
キ座アリ各種状ノ<sup>死造</sup>猿ヲ置ク或ハ卧スアリ或  
ハ踞スアリ或ハ後ニアリ或ハ側ニアリ或ハ懸  
壘スルアリ倒ルアリ壁ニ對シテ重大ナル臺ア  
リ彫刻精巧ナリ群猿相倚ル此臺上ニハ更ニ他  
ノ死猿アリ形容多種ナリ僧ノ打鐘ニ應シテ猿  
舞ヲ助クルノ致人未リ會ス更ニ堂ノ奥ニ高臺  
上ニ屋脊ヲ距ル一遠カラスノ群猿ニ勝レタル  
一<sup>死造</sup>猿アリ日々盛膳ヲ供ス  
大ニ驚クヘキハ此ノ如キ猿寺ハ嘗ニ一イラン

ド時代ヨリ前ニアルノミナラスストラボヨリ  
引クノ証ニ據レハヘルモボリタネルス及<sup>バ</sup>ド  
<sup>巴比倫人</sup>ハ猫佛及猿ヲ尊敬シテ神事スル  
千八百年前ヨリス  
此ノ如ク猿ヲ神事スルハ實ニ嘲笑スヘキ所ナ  
レト亞細亞ニテハ廣ク然ル所ナリ何トナレハ  
嘗ニ日本及支那ニ於テノミナラス更ニマラバ  
ル地方又<sup>マカサト</sup>ト<sup>皮求</sup>トノ間ノ地方<sup>錫蘭</sup>ヤ  
島ニ於テモ猿ヲ神ト為シ奉事スルナリ有名  
ナル以太利人バルゴニス氏<sup>マカサト</sup>ヨリ<sup>皮求</sup>ニ



赴ク旅中記事ニ曰ク。土人パゴラント称スル  
印土佛ヲ奉尊ス。猿像ナリ。又佛ヲモ鍾ニテ繫キ  
ハルレトシノ内ニ置キ其寺ヲ印土寺  
名ク

更ニ着目スヘキ一事アリ。此猿ニ神事スルヨリ  
博學ナルゲラルドホンウス氏モヨリンホイゲ  
ンファンリンスコラテンノ下ニアリ。錫蘭  
島

葡萄牙記者ヨアンネスバルリウス氏ハ明証ヲ  
示シテ曰ク。此錫蘭  
リトヲ創見セシハフランシスキユスアルメイ

夕氏ノ子ナリ。此人サラセ商人ニ隨テモ  
リユフセヨリ。亞刺伯ニ歸ラントノマルジ  
島ヲ歴過セシ片ニ碇泊セシ所ナリ。但シ誤テ茲  
ニ着岸セシナリ。後葡萄牙ノ一軍隊其王ト共ニ  
セ錫蘭  
ノ西部ニ於テ一堅城ヲ建築セリ。之ニ  
從事スルニ方テサラセ商人ヨリ王ニ迫  
テ其挂枝高賣ノ衰減スルヲ鳴ラシテ。教千人ヲ  
率テ。嚴ニ其建築ノ基礎ヲ崩潰セリ。葡人ハ事不  
意ニ起ルヲ以テ大ニ敗績セリ。然レモソアリウ  
ス周旋シテ之ヲ整頓シ。敵ヲ退ケタリ。則チ是ヨ



リ以後年々王ヨリ其罪ヲ謝スルカ為ニ百二十  
萬磅ノ桂枝十二環ノ寶石及六頭ノ象ヲ納レシ  
ムルヲ約定セリ。島民ノ亂妨ヲ防クニコロム  
ボ城ヲ築ケリ。然レ氏曾テ崩潰セシ者ノ如クニ  
堅固ナラス故ニリユビエスブリチエス氏ハ  
多人ノ塚立ヲ送り其城ヲ粧飾セシメリ。則チ貝  
ヲ焼テ石灰ヲ製シ石及他ノ塚料ヲ造成セリ。セ  
錫蘭人再ヒサラセーネシニ挑撥セラレ葡人  
ヲ襲撃セリ。先ツコロムボ城地ヲ假テ拒ミ又漂  
流人ヲ殺セリ。葡人ヲ挑ミテコロムボ城ヨリ驅

逐セリ。葡人紳士遁竄シテ妻子ヲ遺セリ。此時ビ  
チエス氏兵力ヲ以テセスノ市中ヲ鎮靜シ他害  
ヲ為サハラシム。唯婦人及子輩ヲ戸柱ニ繫縛ス  
是一二ハ以テセ。錫蘭人ニ言意ナキヲ示シ一  
ニハ以テ其怒ヲ宥ムルカ為ナリ。此軍畧幸ニノ  
葡人ノ驚ヲ轉シテ福トセリ。何トナレハ遁竄人  
コロムボヲ去ル遠カラスノ一群トナリ。妻子  
ヲ愛惜スルノ念ヨリ獅子ノ勇氣ヲ奮起セリ。コ  
ロムボヲ焼失セサルハ全ク葡人ノ力ニ出ル所  
ナリ。何トナレハ其火ヲ滅シ妻子ノ縛ヲ解クカ



為ニ大ニ蓋シシ。葡人其城内ニ隱匿スルヲ以テ  
ナリ。否ラサレハ之ヲ奪取セラル一キ所ナリ。幸  
ニノ之ヲ失ワサリシ。セ<sup>錫蘭</sup>人ハ二萬人ヲ一  
隊トナシ。コロムボ城ヲ囲ミ。大砲六百門ヲ高所  
ニ備ヘ。晝間長矢ヲ放ツ。野猪皮ヲ以テ被ムリ。二  
百歩外ヨリ之ヲ射ル。觸ル者皆貫通ス。夜ニ入  
テ城内ニ鑄彈ヲ投ス。各所火ヲ<sup>發</sup>テ。頻回ナ  
リ。防護ノ人少ナク。且諸事匱乏ナリ。之ヲ防クヘ  
キノ策ヲ得ス。止ムヲ得ス。三百五十人ヲ以テ敵  
ニ當リ。微力ヲ以テ強兵ヲ拒ム。ニ過キス。敵兵ハ

原野ニ充滿セリ。葡人ヲ討ツ。猛烈ナリ。則チ二  
十五ノ象ニ銃手ヲ多ク載セ。象鼻ニ刺鎌ヲ附シ。  
頻ニ之ヲ震搖セシム。觸ル者皆損傷ヲ蒙ル。此  
象隊ニ纏クニシ。ンガレス歩卒ヲ以テシテサテ  
セネ。シテ助ケシム。百五十ノ強騎兵ヲ以テ左右  
翼トナス。戦争ノ初ニ於テハ。稍不利ナレ。葡人  
勇ヲ奮テ戦フカ。為ニ象隊退行シ。及テセ<sup>錫蘭</sup>  
人ノ後隊中ニ入ル。他ノ象モ亦彼此ニ在テセ<sup>錫蘭</sup>  
隊ヲ蹂躪セリ。此亂軍ニ乘シテ。葡人終ニ<sup>敗</sup>  
アヨリノ援兵ヲ得。千五百五十四年ニセ<sup>錫蘭</sup>

天文二十三年



ヲ火カト兵カトニ依テ乱坊セリ。  
印土ノ一高山ビコデアダムト名クルアリ。[シン  
カレ]人ノ説ニ據レハアダム此地ニ壑跡シ其  
足跡ヲ石ニ留メ今尚存スルニ由ルナリヒユテ  
アタム山ノ頂ニ一美堂アリ粧飾壯嚴其名世ニ  
赫々タル所ナリ是ニ於テ葡人之ニ至リ之ヲ奪  
ハントセリ既ニ其金櫃ヲ開キタルニ一ノ貴  
石ヲ見スシテ唯猿ノ齒ヲ貯ヲ見ル錫蘭人大  
ニ此猿齒ヲ貴重スルハ之ヲ信心スルノ意ニ出  
ク故ニ之ヲ得ルニハ巨額ヲ惜マサルナリ錫蘭

猿齒

人<sup>則チ</sup>使節ヲ葡人ニ送レリ猿齒ヲ購フニ七萬  
ジユカ一テンヲ貴重セリ之ヲ貴重スル一貨幣ニ過  
ク然ルニビスコッフガスハル氏此交易ヲ賤シミ  
謂ラク印土人之ヲ飼フニ禮ヲ以テセサルカ故  
ニ復タ神聖ナラスト乃チ其齒ヲ焼キ之ヲ海水  
ニ投セリ  
ストラボ氏ノ証スル所ニテハシニカレイル人  
ノミナラス往時ハ一ルモポリタリーニネル人モ  
猿ヲ尊テ神ト為セリ余之ヲ記スルニ有名ナル  
詩人ユニウスユヘナリス氏ノ詩ヲ以テセサル



ヲ得ス。羅甸語ナリ。今荷蘭語ヲ以テ之ヲ譯スレ

ハ。昏途ナル。既日土人ハ異物ヲ尊信スルハ誰カ  
之ヲ知ラサランヤ。則テコロコシールヲ拜シ

常ニ蛇ヲ喰ハントスルノ鶴ヲ祈ル。是信  
心ノ意ニ戻リ汚穢ナルバヒアリンナリ。神

聖ハ金中ニ光輝ヲ放ツ。何トナレハノムノン  
スハ幻線ナレハナリ。粗音アリ。且テベスハ

百足ナリ。日本人及他ノ釋教人ハ無智ノ獸類ヲ尊奉  
日本及他ノ釋教人ハ無智ノ獸類ヲ尊奉

スル。寶ニ驚ク一シ之ヲ尊奉シテ神トナシ。造  
物主トナス。但シ造物主ハ獸類トハ遙カニ其價

ヲ異ニスル者ナリ。夫レ真神ハ彼ノ誤慮ヨリ信  
心スル異佛教徒ニハ大ニ驚駭スヘキ者ナリ。然

ルニ釋教ハ獸類ヲ尊奉シ各自ノ性  
負及効用アリテ人身ニ感應シ或ハ隱伏セル智

略ヲ興一或ハ一二ノ記録ヲ想像セシムトシテ  
疑ヲ容レサル所ナリ。

キ希痛。記者リユシアニユスノ説アリ。此リユ







レハナリ又アムブラシオーテハ北獅ヲ尊奉  
ス何トナレハ暴悪人バイルリエスヲ子ニ乳ス  
ルノ北獅ノ裂キ殺ス所トナリタレハナリ又ア  
リストテレス証スルアリ曰クトロアスノ軍  
士ノ胤ニ神事スルハ曾テ敵陣ニ入テ弓絃ヲ啞  
ミ切リタルノ効ヲ感賞スルナリ

釋教派人及ヒ日本人謂ク人死スレハ魂魄轉  
シテ獸體ニ入ル故ニ獸ヲ尊奉スルハ人ノ靈  
魂ノ憑ル所ナリトスレハナリ希臘記者ビ  
ルストラケユス氏アボルロニウスチフネウス

ヲ評シテ曰ク其アレキサンドリネルスヲ才智  
アラシムル所以ハエジプト王アマシスノ化身  
ナル獅子ヲ馴養スルニアリト故ニ僧徒ハ薨去  
ノアマスシヲ供養スルナリ而シテ獅子ニハ金製  
ノ臂環頸帶ヲ着ケエジプトノ内部ニ送レリ而  
シテ之ヲ護送スルニ神歌ヲ唱ヒ聖經ヲ誦シ神事  
セリレオントボリス内ニ立派ナル堂ヲ構成シ  
テ獅子ヲ置ク所トス蓋シ勇猛王アマシスノ靈  
魂寄寓スル所ナレハ租屋ニテハ不敬ナリトス  
レハナリ



然レ凡人ノ靈魂移住スルニハ猿ヲ尤モ適當ナル構成ナリトス何トナレハ其外貌内景大ニ人身ニ類似スレハナリ抑モ外貌ハ言ヲ疾クス其内景ニ就テハアリストテレス氏ノ説アリ曰ク猿ノ内景ハ人身ニ同シ故ニ解剖家ノ屍ヲ缺ク片ハ猿體ニ就テ其術ヲ研究試ムルナリガレニユス氏曰ク猿ハ能ク人ノ為ス所ヲ倣フトクローリウスロジギニユス証スル所ノ如シ舊羅旬詩人エウニユスノ詩ハ人口ニ膾炙スル所ナリ猿ハ大ニ人身ニ類似ス且耻ヲ知ルノ獸ナリ

ニコラーニスチユルブ君アンゴラヨリブリンスフハンオラニーフレデリツキヘンリキニバヒアーニスノ説ヲ寄ス曰ク是印土人ジアーネンノオラングオウラングト名補ル所ナリ身長三歳児ノ如ク身大六歳児ノ如シ肥胖ナラス瘦削ナラス強壯多力ナリ前頭ハ禿ニシ後頭ニ黒毛叢生ス顔面細毛アリテ粗糲ナリ鼻大ニ低扁壓ナリ之ヲ概言スレハ脱齒ノ老婆ノ狀ニ異ナラス耳ハ大ニ人耳ニ似タリ胸ニ両乳房アリ腹ニ陥没セル臍高アリ臂ハ屈伸スヘク手足ニ全指アリ以上



大ニ人身ニ似タル所ナリ直立シ運歩シ能ク重  
 荷ヲ攀ク淫情動ケハ一手ニ陰莖ヲ擡ケ一手ニ  
 テ耳ヲ回ク掩フ既ニ淫スレハ頻ニ唇ヲ舐ム眠  
 ニ就クニハ腹ヨリハ頭ヲ攀ク適宜ニ之ヲ被フ  
 猶腹弱ナル中女ノ尊上ニ在ルノ状ノ如シト更  
 ニ上ニ説ク所ノチユルプヲ説ク一シサムバセ  
 王自ラ其近隣人サムミユルブルロムマールト  
 ニ告テ曰クバヒアトネシハ一種ノ男ナリ波ボ  
 不羅オ島ニテ粗暴ニ軍卒ヲ襲ヒ婦人ニ奸淫スト  
 夫レ猿ハ人ト大ニ相似タルヲ以テ日本人殊ニ

ベタゴリセ學ヲ信シ魂魄ノ他体ニ移轉  
 スルヲ唱フル人ハ王及王妃ノ靈猿ニ  
 移ルト謂フ阿蘭使節ハ戸塚ニ在ル猿  
 寺ヲ江戸ヨリノ帰途ニ一見シ十一日  
 ノ後則チ四月二十七日ニ京都ニ着セ  
 リ是日日本ノ大市場ナリ此地ニハ各寺  
 院アリ坊主之ニ住ス其内ニハ懺悔  
 シテ塵世ヲ脱セントスル者アリト  
 虽多クハ唯耻ヲ顧テ惡業ヲ為サハ  
 ルノミ一雀一蠅ヲモ殺サス



羅旬ノ詩人ニヘナリス氏。既日土人ヲ  
嘲弄スル詩アリ。

葱及煙ヲ送ルハ不信心ナリ。而ノ之  
ヲ食スルハ妨ナシ。園中ニ播種スル  
モ阜上ニ送ル勿レ。獸類果實山羊  
ハ妨ナシ。既日土人ハ自在ナリ。人  
ノ腹ヲ多食ス。

京都ニハ將軍公方及大岡様并ニ内  
裡ノ宮殿アリ。使節フリシラス氏及  
ブルクホルスト氏四月三十日マ

テ京都ニ逗留ス。其家主及奉行衆  
誘導シテ神社佛閣ヲ歴觀セシム。  
則チ乘物ニ乗り高人ト同伴シテ  
社寺構造建築ノ壯大ナルニ驚ケ  
リ。飽マテ諸所ヲ觀ルノ後一休息  
所ニ憩フ。主人盛ナル夕膳ヲ供ス。  
飽醉シテ夜ニ入り旅舎ニ歸レ  
リ。壯嚴ナル建築中ノ最ナルハ公方ノ  
邸ナリ。口デウエーキフロユス氏ノ証



スル所ニテハ歐羅巴ニテモ全印  
土ニテモ此ノ如キノ此ヲ見スト  
其園中ニハ杉柏松檜及ヒ他ノ名  
ヲ知ラサルノ樹木アリ其排置整  
然亭榭堂宇相散布シ百合薔薇及  
ヒ各種ノ芳香花草アリテ壘ニ目  
ヲ喜ハシムルノミナラヌ更ニ鼻  
ニ快カラシム

京都鎮臺ノ宮殿亦美麗ナリ樹木花草ノ佳觀ナ  
ルノミナラヌ更ニ九千歩ノ遠キヨリ水ヲ引テ  
巖間ヨリ注キ園ノ中央ニアル池ニ流レ入ラシ  
ム此ノ池ノ周囲ニハ密樹蔚蒼タリ池中各様ノ  
鳥峽アリ石造或ハ木製ノ橋ヲ架シテ相交通ス  
浴外ニ大樹林アリ坊主ノ五十寺アリ各寺廣大  
ナルト非常ナリ口デウエーキフロユス氏其一ニ  
ヲ記スルト左ノ如シ此寺院ニハ多クハ諸侯ノ  
子弟住居スルナリ而ノ其員鮮クナラス且各々  
相競テ美麗ヲ勉ム余氏ヲロユス耶蘇教徒ノ誘導







ハ廊下ノ中央ニ終ル。其下ニ兩側ニ四室アリ。上層ハ皆圓天井ナリ。各室ニ光ヲ通スルノ九廣窓アリ。警固ヲ嚴ニス。上下空間ノ外壁ハ精巧ナル漆画アリ。内裡ノ記章アル。旗幕ヲ掲ク。此建築ニ對シテ壁アリ。全園ヲ遶ラス。土堤ハ石造胸壁ナリ。立派ナル番所アリ。内壁ニ沿テ建築多シ。前門トノ間ニ廣所アリ。美石ヲ敷ク。内裡他行スルヲアレハ。大駮動ナリ。則チ閑タル輦ニ坐シ。美衣ヲ服スル。十四夫ニテ之ヲ荷フ。輦ハ細長ク。四角ニノ金具ニテ巧ニ飾レリ。天井ハ穹窿狀ニノ四方ヨリ集マリテ一尖點ニ終ル。四邊ニ絹布ヲ張り。内ヨリハ外ヲ見ルヘキモ外ヨリハ内ヲ見ルヲ得サラシム。輦夫ハ肩上ニ長棒ヲ載セ。荷フ輦前ニハ護衛ノ士徒行シ。兩側ニハ千百ノ日本人。地上ニ平伏シテ。行装ヲ拝ス。内裡ノ輦後ニハ二從僕手綱ヲ取ル。馬具總テ眞珠寶石ヲ以テ飾ル。馬ト乗物トノ間ニ二人アリ。甲ハ頻ニ大扇ヲ動カシ。乙ハ高ク日傘ヲ掲ク。乗物ノ内ニハ皇妃坐スルナリ。其後ニ美車二十輛隨フ。皆ニ輪ナリ。同シク二馬ニ駕ス。手綱ニテ曳

立派ナル兼車アリ。千馬ニテ之ヲ曳ク。馬頭ニ美飾ヲ備



ク是嬪妾ノ坐スル所ナリ。四方窓アルカ故ニ内ヨリハ能ク外ヲ見得ルモ外ヨリハ決シテ内ヲ見ルヲ得ス。此一車毎ニ一群ノ宮女アリ。隨行ス其負致夥シク大ニ行装ヲ鎊ルニ足ル。又空地ノ左右側ニ各様ノ宮殿アリ。構造ノ法皆趣ヲ異ニス共ニ其工ヲ極ム。國庫ヲ傾ケテ之ヲ營ム其側ニ内裡ノ庖厨アリ。之ヨリ食物ヲ調理シ出シ。後宮ト内裡ノ園圃トノ間ニ送ル。日々百鉢ニ過ク庖厨頗ル廣大ナリ。土ヲ墁ス食物ノ為ニ消費スル。一年々金幾トシキヲ知ラス。

後部ニ非常ニ美麗ナル偃息所アリ。彼此ニ高塔アリ。高壁ニテ教室ニ分ツ其最モ拔群ナルハ園圃中ノ山頂ニアル圓宮ナリ。樹木整然トシテ排列シ。樹林草花區域ヲ異ニシ。其形狀人工以テ天工ト奇ヲ競ヒ巧ヲ争ヒ。彼ノテサリ。ニ於ケル有名ナルテムペ及アートニスノ園ハギリシ。及羅甸詩人ノ常ニ大ニ賞讚スル所ナルモ敢テ此及

此ノ如キ諸建築及偃息所中ニ於テ最モ超抜ナルハ内裡住居スル所ノ宮殿ニシテ屋脊高ク天ヲ



衝ク堅壁ニテ圍繞シ画彩ニテ粧飾ス入口ニハ  
 廣キ銅製ノ十五級<sup>階</sup>アリ其下脚兩側ニ番所アリ  
 同形ナリ各番所四角ニノ廣キ戸廣キ窓アリ満  
 壁ニ弓矢ヲ飾ル屋脊四方ヨリ起リテ一中點ニ  
 會シ鍍金ニテ被フ而ノ四邊金樋ヲ架ス  
 番所ノ側ニ園アリ壁ニテ所<sup>ノ</sup>四隅ニ八角ナル  
 遊戯所アリ其屋脊銳尖ニノ挺起ス園中ノ景色  
 詳記スル<sup>ノ</sup>能ワス銅級ノ末端ニ前門アリ双方  
 ニ美麗ナル八柱アリ金板ヲ以テ被フ草花ノ画  
 ヲ彫刻ス屋脊ノ中點稍高シ周縁彫刻精緻ナリ

全部金彩燦爛タリ板敷ハ平滑ニノ琢磨スルカ  
 如シ前門番所ノ後ニ高ク廣キ地アリ地上大理  
 石ヲ敷ク之ヲ熟視スルニ驚クニ堪タリ  
 宮殿ノ<sup>前面</sup>見掛<sup>リ</sup>ハ他ノ建物ニ浴テ挺出  
 シ門ハ大ニ濶シ兩側ニ大柱立ツ全部彫刻アリ  
 上縁ハ大ニ傾ク壁ハ門ヲ挟テ左右草花ヲ画ヲ  
 彫刻ス屋脊ニ金ヲ鍍ス其末端ハ金樋ニ接ス殊  
 ニ兩隅ニ龍ヲ置ク  
 第一屋脊上ニ第二屋脊張出シ十六柱上ニ安ス  
 此内五大室アリ各室ニ重窓アリ



日本<sup>將軍</sup>帝ハ六年每二百十六里ヲ經テ京都ニ来リ  
 以テ内裡ヲ慶賀ス。此旅行ノ前年ニ之ヲ沿道諸  
 國ニ公告シ。道路ヲ脩理セシム。宿泊二十八所。内  
 二十ヶ所ハ城郭アリ。以テ旅舎ニ當ツク。一ノ  
 一ドカラムノル氏曾テ東印土商會ノ<sup>領事</sup>領事ニテ  
 日本<sup>將軍</sup>帝ニ使節タリシ。則<sup>寛永</sup>千六百二十六年京都  
 ニ逗留セリ。其紀事中ニ曰ク。日本<sup>將軍</sup>帝ハ内裡ニ慶  
 賀セントスルニ方テ。荷蘭使節ニハ拜謁ヲ許セ  
 リ。但シ暹羅及葡萄牙使節ニハ。教テ之ヲ許サレ  
 リ。シナリ。是ニ於テカラムノル氏ハ執政及<sup>將軍</sup>帝ニ

拜謁シ。職務ヲ遂ク<sup>ル</sup>キヲ許サレタリ。諸事整頓  
 將ニ平戸ニ帰ラントス。而ルニ平戸候及内閣吏  
 覺右衛門殿ノ周旋ニ因リ。日本<sup>將軍</sup>帝ト内裡トノ應  
 接ノ行装ヲ拜見スル<sup>ル</sup>ヲ得タリ。  
 カラムノル氏前夜ニ其同伴人ト共ニ<sup>將軍</sup>帝居ニ近  
 キ所ノ一屋ヲ借り宿ス。翌日即チ十月二十五日  
<sup>將軍</sup>帝及内裡。此地ヲ通過スヘキナリ。人民群集。道路  
 ニ充塞シ。大ニ通行ニ難ノリ。翌朝唯人員充滿ス  
 ルヲ見ル<sup>ル</sup>ニ<sup>將軍</sup>帝居ト内裡宮殿トノ間ノ市街<sup>上</sup>ニ  
 白砂ヲ敷ク。各戸ノ前ニ柵ヲ構ヒ番人アリテ之



將軍之禮

ヲ警固シ。敢テ人ノ柵外ニ出ルヲ許サス。此警固ノ  
士ハ一ハ内裡ニ屬シ。一ハ將軍帝ニ屬スルナリ。各士  
潤キ白衣ヲ着ケ。腹ヨリ至テ地ニ接シ。黒漆ノ笠  
ヲ頭上ニ戴キ。腰ニ双刀ヲ佩フ。手ニ鎗ヲ執ル。日  
本人之ヲ長刀ト名ク。此警固ハ日本全國ヨリ集  
リ来ル。歩兵騎兵ニノ二日前ヨリ京都ニ會シ。露  
宿シテ非常ヲ警ムル所ナリ。賈小南人輩ヲ為シテ  
諸般ノ食物ヲ販ク。窓及屋脊ハ監檢視ノ見分スル  
所ナリ。

日出ニ乘シテ先ツ立派ナル行装ニテ將軍帝及内裡

儀從僕ヲ見ル。内裡ノ輿夫ハ其用具ヲ四角ナル  
漆器ニ入レ荷ヒ。鍍金セル具足ヲ着シ。將軍帝居ニ赴  
ケリ。警固嚴重ナリ之ニ次テ四十六挺ノ駕籠ア  
リ。内裡ノ宮女ノ乗ル所。各四人ニテ之ヲ荷フ。此  
駕籠ハ白木ニテ造ル所。高サ一尋。黃銅ニテ鍍ル。  
全面綠色漆料ニテ画彩ス。此駕籠僅カニ過キ去  
レハ。次テ他ノ二十挺ノ駕籠アリ。是黒漆ヲ塗リ。  
鍍金セルナリ。亦各四人ニテ之ヲ荷フ。宮女盛装  
シテ謹慎セリ。更ニ二十七挺ノ乗物アリ。百八人  
ニテ荷フ。從僕者皆壯實ニノ同一様ニ白装ナリ。乘



物内ニハ内裡ノ若<sup>近侍</sup>貴人アリ戸及窓ヨリ外ヲ見ルヘシ衆物ノ前ニ強壯男子アリ白絹ヲ張り彩画アル日傘ヲ捧ケテ衆物ヲ蓋フ

次テ貴人二十四人騎馬ナリ前頭ニ小ナル漆帽

子烏帽ヲ戴ク其外套ハ洞袖ナリ袴ハ精緻ナル縹

子ニテ製ス長ク狭ク褶褶アリ金銀糸ヲ以テ巧

ニ織成スナリ腰ニ鍍金セル双刀ヲ佩フ中間ニ

眞珠ヲ飾リ其末端ハ馬ノ脇ニ垂ル刀鞘ハ漆塗

ニテ巧ニ金線ヲ箱ス馬首ハ小ナリ耳及腹共ニ

小ナリ騎馬ニハ最モ適セル容貌ニテ整羅巴人

ノ大ニ好ム所ナリ鞍ハ鍍金セル角ヲ當フ鬣ヲ

飾ルニ金銀糸ヲ以テ纏フ胸及尻ニ紅色ノ絹綱

ヲ張ル鍍蹄ニ代ルニ紅色絹ニテ製セル浴ヲ以

テス各馬ニ人ニテ之ヲ曳ク二個ノ大ナル日蓋

ヲ張ル一騎兵毎ニ從者八人皆白衣ヲ着ケ双刀

ヲ佩フ足<sup>歩法</sup>整然トシ内裡ノ宮殿ヨリ<sup>將軍</sup>帝居ニ向

テ進<sup>行</sup>歩スルナリ

愈久ヲシテ警固ノ士愈增多シ既ニノ三輦来レ

リ共ニ二大黒牛ニテ之ヲ引カシム紅色絹ノ綱

ヲ被ラシム白衣ヲ着クル四<sup>御者</sup>僕ヲ一牛ニ配ス各



輦高サ四尋長サ二幅尋幅尋一ナリ。黒漆金彩燦然タリ。三窓アリ高價ナル帷ヲ壅ル。入口ハ後側ニアリ。立派ナル宮殿ノ門ニ異ナラス。左右ニ番人アリ。車輪ニハ金縁ヲ附シ。木椀ニハ金條ヲ具ス。天井ハ穹窿ナリ。前後ニ程飭アリ。宮殿ノ狀ニ似タリ。屋脊ハ金板ニテ葺ク。凡天井ハ黒漆塗ニテ内裡ノ記章ヲ現ス。此三輦内ニハ皇妃三人ヲ置ク。夥シキ隨從ノ人車輦ノ近側ニアリ。各輦後ニ鍍金セル踏臺ト一對ノ上階アリ。各輦ノ結構ナルヲ其價巨額臆測ス可ラス。蓋シ百九十萬九百ギユルデ

ニナリト云ハナリ。

夥シキ從僕者アルノ外。此三妃ニハ侍女多ク。乘物二十三披。白木ニテ製ニテ。黃銅ニテ飭リ。四人ニテ荷フ所ナリ。兩側ニ漆フ者アリテ。乘物毎ニ日覆ヲ掲ケ。蔭ヲ設ク。

此女群通過ノ後。内裡ノ近侍若キ貴人。六十八人。騎馬ニテ二行ニ排列ス。此騎馬者ノ歩法大ニ前者ニ異ナリ。一騎馬毎ニ隨從ノ多人アリ。之ニ次テ進物ヲ荷フ者極テ夥シ。則チ鍍金セリ。二刀外装ニ金ヲ飭ル。製作精巧ヲ極ム。火器一具。非常大ナル時針。



盤一。黄金燭臺一對。黑檀柱二本。黑檀扎三脚彫刻  
精巧。金箔ヲ撒スルノ書卷ヲ載スルヲ多シ。別ニ  
此ノ如キ者四脚。但シ稍大ナリ。黄金鉢二枚。漆塗  
ノ上階一對。

④

此ノ如キ進物ノ次ニ驚ク一キ貴價ノ二輪車ニ  
軻アリ。是前ニ三妃乗ル所ニ異ナルヲナシ。但シ  
帝ノ<sup>將軍</sup>記章ヲ現シ。金輪ニテ圍ムヲ異ナリトス。其  
前車ニ<sup>將軍</sup>ハ左大臣源秀忠公。後車ニ<sup>世子</sup>ハ幼帝石大臣  
源家光公ナリ。此二公ニ前行スルハ。近臣徒歩ス  
ル者八十對。各<sup>二</sup>刀ヲ佩ヒ。一長鎗ヲ執ル。是帝ノ

老幼二帝

護兵ナリ。日本人之ヲ侍ト<sup>稱</sup>名ク。皆貴族ナリ。勇壯  
剛強ナリ。又帝車ニ浴ヲ勇士八人步行ス。四人ハ  
四角ナル檀木ノ捧ヲ持テ。四人ハ鍔捧ヲ以テ道  
ヲ開ク。又美麗ナル二馬アリ。其壯飭ノ美麗ナル  
幾何價ナルヲ知ラズ。各車ヲ曳カシム。例ニ八軍  
人アリ。弓矢及鎗ヲ執ル。  
老幼二帝ノ<sup>將軍</sup>後ニ整然タル位置ニテ。兩第及全國  
ノ大小候伯相從フ。其員百六十四家ナリ。各々行  
装ヲ飭リ。從者アリ。馬及駕籠アリ。各々隊ヲ為シ。  
其身位ニ應シテ相當ノ裝飭アリ。先<sup>將軍</sup>ヲ帝ニ次ク



ハ尾張候紀伊候及水戸候ナリ。共ニ老帝<sup>將軍</sup>ノ弟ナリ。次ニ松平筑前守是加賀ノ一大候ナリ。松平薩摩守是薩摩ノ大守ナリ。松平ヨシトノ松平下野守松平キエカシネノシヤウ。駿河大納言殿ナリ。以上十候ハ<sup>將軍</sup>帝車<sup>ノ</sup>後ニ近接シ。各々順次ヲ紊サス。皆家臣從僕ヲ伴フ。

其他ノ百五十四候ハ二行ニ併列シ進行ス。而シテ大候ハ右側ヲ<sup>執</sup>取<sup>キ</sup>リ。小候ハ左側ヲ<sup>執</sup>取<sup>キ</sup>リ。柳毛日本<sup>人</sup>ハ右側ヲ上位トスレハナリ。就中盛ナルハオウツイドレネ。及オウウラドンネナリ。是甲ハ老帝<sup>將軍</sup>ノ<sup>第一</sup>執政ナリ。乙ハ幼帝<sup>將軍</sup>ノ執政ナリ。後從ハ軍卒二百對ナリ。

更ニ新輦六輛アリ。其大サ前者ニ半ス。但シ構造相同シ。皆一牛ニテ曳ク。此内ニハ内裡侍妃ノ乘ル所ナリ。次テ六十八人ノ貴人アリ。各多勢ノ從者アリ。各個ノ四輪車内ニハ内裡ノ秘書記アリ。美馬三十七騎隨フ之。次テ駕籠十五挺。黒捧ヲ附ス。更ニ黒捧駕籠十三挺アリ。漆塗金彩燦然クナリ。更ニ十八挺ノ瀝青黒塗捧アリ。輿夫多致相紛亂ス。日覆ヲ持ツ者四十六人。副手アリテ交代ス。



次テ五十四人ノ一隊アリ。衣装異様ナリ。樂隊奏  
樂以テ内裡ヲ慰ムルニ供ス。各様ノ器ヲ合奏シ  
歌曲ニ應ス。管ヲ吹クアリ。孟ヲ叩クアリ。喇叭及  
鼓アリ。絃アリ。歐羅巴人ノ曾テ見聞セサル所ノ  
器アリ。

此樂隊アリテ始テ内裡ノ輦アリ。大ナル四角室  
ナリ。扉アリ。屋脊ノ尖ニ鍍金セル塊アリ。純金製  
ノ鶏鳳アリ。大ニ其翼ヲ張ル。以テ室ヲ覆フテ蔭ヲ  
為ス。其高サ一尋半。周圍彫刻極テ精巧緻密ナリ。  
角ヲ包ムニ純金ヲ以テス。其價計ル可ラス。周圍

彩色アリ。天青色ナリ。周圍ニ日月及星辰ヲ現ス。  
内裡ノ貴人五百人。長キ白衣ヲ着ケ。黒色帽ヲ載  
ク。長キ棒ニテ内裡ノ輦ヲ荷フ。其前ニ從者二十  
對。衣装羅馬様ニ依ル。頭上ニ歐羅巴帽ヲ載ク。一  
手ニハ鍍金セル長刀ヲ持テ。一手ニハ楯ヲ持ツ。  
其中間ノ輪内ニ多矢ヲ立ツ。各人日覆ヲ執テ蔭  
ヲ取ル。是皆内裡ニ近侍スル人ナリ。其後ニ強勇  
五十二人。大ナル金箱十三ヲ荷フ。更ニ後從五百  
人。白衣ヲ着ケ。六隊ヲ為ス。  
全隊通過シ終ル日既ニ没セリ。百事驚駭ス。



ノ外他十シ。沿路ノ棧敷及家屋ノ人員充滿シ。相  
壓死スルニ至レリ。或ハ壓倒セラレ。或ハ蹂躪セ  
ラル。全街蹄叫喚ノ聲アリ。騎馬縦横ス。驅逐シテ相  
往來シ。馬蹄ニ蹴ラル者アリ。損傷出血スル者多  
シ。此混雜ニ乘シテ拘賊横行シ。手裡ニ小刀ヲ持  
テ。觸ル所ノ者ヲ截り取り。竊カニ之ヲ奪去ス。或  
ハ卒然トシテ毀傷シ。死ニ至ルラシムルアリ。或ハ我身倒レ  
テ他ヲ壓シ。後者之ヲ知ラス。愈之ヲ押ス。或ハ  
相鬪争シ。全街蹄泣シ。全都ヲシテ血浴ニ陥ラシ  
ノリ諸彼所ヨリ歸家セントスルノ衆物通路ニ途

ニ。乱坊人之ヲ路ニ要シテ奪ヒ去リ。貴人玉候ノ  
別ナク。馬ヲ截り。駕籠ヲ踏碎キ。從者ヲ毀傷シ。恣  
ニ惡事ヲ為スモ。之ヲ制スルヲ能ワス。  
ク。一シラードカラムノル氏ハ。其同伴人ト共ニ  
棧敷ニ於テ此如キ一驚事ヲ見タリ。若シ夫レ  
茲ニ徹夜セシナラハ。必ラス殺害ヲ免カレサリ  
シナルヘシ。其騷亂スルニ方テヤ。全街中士ヲモ  
見サルニ至ル。幸ニノ損傷ヲ蒙ラスシテ。旅舎ニ  
歸ルヲ得シハ。神ノ呵護ニ因ル所ナリト云ヘ  
シ。



内裡<sup>將軍</sup>帝居ニ滞留スル一日夜是<sup>老</sup>幼帝及老帝又  
其第等<sup>將軍</sup>密奉敬事スル所ナリ。膳部ハ執政ニノ京都  
ノ守護ナル。シユガドノノ主宰スル所ナリ。又ヨ  
シカモサマ小堀遠江守中村空右衛門間野三良  
左衛門之ニ關セリ。内裡ノ每膳百十四菜ナリ。内  
裡ノ三后妃ニハ其膳部ハ老帝<sup>將軍</sup>ノ執政オツイド  
ノノ宰スル所ナリ。又執政播磨殿キユイニモシ  
ドノシヨイセロンドノ及四郎太殿之ニ關セリ。  
更ニ幼帝<sup>將軍</sup>ヨリ内裡ニ銀三千枚黄金刀一對錦二  
百卷縹子三百卷粗絹一萬二千磅カラムバク一

個麝香五壺乘馬十疋諸具ヲ備フ。内裡ノ秘書記  
ニハ銀三百枚羽織十二枚但シ老帝<sup>將軍</sup>ヨリノ進物  
ハ稍之ヨリ減ス。  
又京都ハ日本人カブコマト称ス。分テ上京下京  
トス。下京ハ伏水ニ連接ス。家屋連續シテ数里ニ  
亘ル。内裡ノ宮殿ハ上京ニアリ。又別ニ驚ク一キ  
宮殿アリ。千五百八十六年ニ於テ太閤様ノ建築  
スル所ナリ。千疊敷アリ。緞子天鷲絨金絲ヲ以テ  
織成スルナリ。棗室ノ壁ニハ純金ヲ貼ス。宮殿多部  
ハ高價木找ヲ以テ構フ。他ハ美ナル大理石ヲ敷



ク宮殿前ニ廣潤部アリ將軍帝ハ茲ニ於テ劇場ヲ開

キ杖ヲ演セシム悲歎及歡樂ノ状ヲ示ス

此ノ如キ遊技ハ日本人ノ工妙オル所ナリ精巧

ナル作者ニ乏シカラス能ク韻調ニ合シ舞曲ヲ

演ス其芝居ハ尋常敷局ニ分ツ後端ニ於テハ全

局ノ大概ヲ領知セシム然レモ黙シテ敢テ之ヲ

説カス者官ヲシテ其結局如何ヲ企望セシム既

ニノ混雜事件紛起シ愈久フシテ愈錯雜ス是者

者ノ結局ヲ假想セシムルナリ是ニ於テ意表ノ

事件起リ悲喜相分ルノ端ヲ後中漸クニノ結果

ニ至ルナリ其間ニ俳優舞手踊者相交ハル歡樂ノ曲

ニハ人生禍福應報勸善懲惡ノ意ヲ標シ悲哀ノ曲ニ

ハ哲人不幸ニノ冤ヲ含テ死ニ就クノ状ヲ演ス

日本人ノ演技ニ巧ナルヲ猶希臘人及羅甸人ノ如シ況

ンヤ之ヲ創草スルニ於テハ最モ感スヘキナリ茲ニ演劇ノ

前後其起源ヲ論スル衆説紛々タリ但シ多クハ曰ク

タラゲジーンレハユンジーンヨリ早ク起レリトタラゲジーンレ

ニ枚ノ名後文ニ詳説アリ而シテ此タラゲジーンナル語意ハ學者ノ大ニ

ト蓋シ山羊ノ語中ニハタラゲジーンノ初四字ヲ含メハナリ



此説ニ加擔スル者多シ。抑モ愁歎演劇ノ源ハ異神バ  
ツキユスヲ追尊スルニ起ル。蓋シ山羊バツキユスノ葡萄  
園ヲ大ニ損害シタルヲ以テ其山羊ヲ殺シ之ヲ神前卓上  
ニ致シタルニ因ルナリ。羅馬ノ博士マルキユステレンチウ  
スハルロ氏尚之ヲ証ス。則俳優ノ山羊ヲ尊奉スル所以ナ  
ナリト然レモ又一説アリ曰ク此語ハ塗料ノ義ヲ取ル。  
希臘ニテハ之ヲトリユガト稱スルテ俳優ノ口唇  
ヲ塗ルナリ。

又希臘テスビスヲ鼻祖トス。此人杖ヲ車上ニ演  
セリ。則チ羅甸詩人ノ詩アリ。

世人曰フテスビスハ未發ノ所作ヲ演セリ。

悲調ノ歌曲ナリ。車ヲ運轉シテ之ヲ演ス。車

ノ汚垢其人ノ口縁ヲ汚セリ。蓋チキ車上ニ

演セリ。

悲歎杖ノ要用ナルハ舊時ノ詩人チモクレス氏  
之ヲ詳脱セリ曰ク彼杖ハ人生悲哀ノ狀ヲ寫出  
スルヲ以テ人若シ貧困スルハ方テハテレヒ  
エスノ貧苦ノ狀ヲ想像スヘシ。又子ヲ喪フノ父  
ハ無子ノニオベヲ想像スヘシ。多事騷擾ナルニ  
方テハアルタマーオンノ狂顛セル所以ヲ追想



スヘシ。故<sup>是</sup>ニ以テ艱難辛苦ニ過ラズ。古人耐忍ノ  
意ヲ推察シ。大ニ汝ノ心ヲ慰ムルニ足ル。一アル

一シ。然レ氏コメジ。ニ就テハハル。曰クアツキニ

少年輩ハ常ニ村落ヲ巡廻<sup>シテ盛ニ遊嬉觀樂</sup>スルヲ風習トス。而シテ

盛ニ歡樂遊嬉スコノジ。ハコノニ出ツコノハ

希臘語ニテ村落ノ義ナリ。オデハ歌ナリ。此技漸

次ニ盛昌シ。終ニ某ノ時某ノ地ニ於テ一場ヲ開

キ。衆人群集中ニ於テ之ヲ演シ。觀ニ供セリ。蓋シ

觀者ヲシテ相交遊歡樂セシムル為ナリシセ也。

ハ此ノ如キ技ヲ名ケテ。活歴史。風俗ノ鏡。事實ノ

圖<sup>影像ナリ</sup>ト云フ。希臘人中エウボリス。セーアチニエス。アリスト

バネス。及メナンデルヲ以テ。拔<sup>巨</sup>群トス。幸福ナル

歡樂劇ヲ妙文ニテ記シ。大ニ名ヲ世界ニ轟カセ

リ。後希臘ヨリ俳優ヲ以太利ニ舟送セリ。此地ニ

テハバキユヒウス。グラウキユス。及テレニキウ

ス等。巨擘タリ。各々新技ヲ演セリ。

舊コノジ。ンヲ以テ第一等ト為ス。一キニ似タ

レ。其技大ニ粗笨ナリ。且ツ時事ノ大<sup>長</sup>短<sup>可</sup>典<sup>否</sup>ヲ

要

舊コノジ



明テカニ技ニ演シ。又且人ヲ称スルニ本名ヲ以テ  
 ス。抑モ事實ヲ演スルハ衆民ノ大ニ喜フ所ナレ  
 ハ。則チ官吏ノ短所ヲ鳴ラシ。事ノ不都合アレハ  
 之ヲ演スルニ至レリ。殊ニ詩人ハ自家ノ思想ヲ  
 以テ之ヲ抑揚シ。其極本人ノ失策錯誤ノミナラ  
 ス。更ニ類似ノ事ヲ附會スルニ至レリ。サンネー  
 リスニ於テ一劇場ヲ開キ大ニ世ノ喝采ヲ得  
 タリ。蓋シ其技大ニ租暴ニ直リ。結果及家業ニ制  
 限ナリ。俳人定數ナシカラチニユスニ至テ早ク  
 五齣ヲ定メ。而シテ復タ每齣三人ヲ要セス。再後ア  
 リストバネスニ及テ。始テ此技ヲ完全セリ。

但シ希臘ノ威力愈増加スルニ及テ。此人民ノ自  
 在力ヲ壓制シ。大ニ俳優演技ノ制ヲ定ム。是ニ於  
 テ面目ヲ一變シ。當時ノ眞狀ヲ觀ント欲スルモ  
 猶蠅ヲ隔テ物ヲ見ルカ如キナリ。後新コノシ  
 起レリ。羅甸人ニ於テハリヒウスアンドロニキ  
 ユスヲ鼻祖トス。自ラ宴上遊劇ヲ教授セリ。バキ  
 ユビウス大ニアンドロニキユスノ短所ヲ補綴  
 シ。フテウチユス及テレンテウスニ及テ之ヲ充  
 備セシメリ。



譯者案スルニ。往古希臘國ニ紀元前五百二十  
六年。我紀元百二十年。セスヒスト云フ人アリ  
其國民等。葡萄ノ成熟ヲ祝ヒ酒ノ神バキユス  
ヲ祭リ。酒筵ヲ設クル片ニ方テ座中ヨリ能辨  
ニシテ滑稽ヲ善クスルモノ一人ヲ撰ミ種々  
ノ一ヲ演說セシメ。神ヲイサメ諸人ヲ悞シマ  
シムル一ヲ發明セリ。之ヲ歐羅巴演劇ノ濫觴  
トス。其後セスビス一個ノ車ヲ製リ。演說者ヲ  
載セ諸村ヲ巡廻シテ祭ヲ助ケシメたり。是ヲ  
戲冊ノ權輿トス。以上藝術叢談第二云々本史

演劇ノ權輿トス

抑モ日本人ハ悲哀及ヒ歡樂ノ技ヲ  
演スルニ敢テ希臘人ニモ羅甸人ニ  
モ譲ル一ナシ。更ニ巧ニ戀婦情郎憤  
怒ノ老翁詐欺ノ家僕他ヲ欺クノ娼  
妓遊蕩少年ノ狀ヲ摸シ。又其高慢橫  
柄ナル公侯ヲ演スル能ク真ニ迫ル  
ハ。遠カニ歐羅巴人ニ勝ル所ナリ。然  
レ氏此ノ如キ狀ハ決シテ太閤様ノ  
宮第ノ如キ整然タル地位ニ於テ演  
スヘキニアラザルナリ。此場ノ双方



二 二個ノ美塔ト 四個ノ廊下アリ  
 一 高ク聳ユ  
 又 敷様ニ屈曲シ 高壁ニテ區劃ス  
 ルノ馬埭アリ 觀者群ヲ為シテ 御  
 者ノ周圍ニアリ 御者ハ日本風ニ  
 脚ヲ折テ坐ス 頭上ニ甲ヲ置キ之  
 ニ銅丸及ヒ盃ヲ掛ク 又地上四所  
 ニ置キ之ヲ叩キ鳴ラス 一嚴ニシ  
 殆トト耳ヲ聳ナラシム 馬埭ノ末  
 端ニ二本ノ強キ柱アリ 太キ繩ヲ  
 張ル 此張繩ノ稍後ニ重大四角ナ  
 ル柱ヲ立ツ 之ニ大旗ヲ掲ケテ長  
 ク披出ス 一日本人其柱ヲ抱キ右  
 手ニテ一人ノ胸ヲ指示ス 其人頸  
 ニ四角ナル板ヲ掛ク 一鷲鳥ノ状  
 ヲ記ス 此人右手ヲ柱上ニ置キ左  
 手ヲ刀ニ倚ス 勇三人側ニ立ツ 結  
 節アル鞭ヲ附スル 棒ヲ右掌ニ握  
 ル 以テ競者ニ示スノ標ト為ス 其  
 後ニ三人立ツ 共ニ帽ヲ戴ク 其端



二 黒色羽毛ヲ束ヌ。是甲乙優劣  
 ヲ點視スル。鑿夷ナリ。其褒賞ハ  
 鞍一具。或ハ銀具ヲ備フル。鎧ナ  
 リ。競走者ハ腹ニ薄キ絹衣ヲ着  
 ケ。脇ニテ合ス。袖ハ臂下ニ及ヒ  
 袴ハ掲ケテ膝上ニアリ。脚ニハ  
 脚絆ヲ纏フ。競走中伶人音節ヲ  
 合シテ。盃ヲ鳴ラシ。其響キ驗然  
 タリ。標示ヲ見テ馬及人則チ歩ヲ進ム。馬ハ一  
 索ヲ以テ口圍ヲ纏ヒ走者之ヲ左手ニ固持ス。馬  
 ノ四脚ヲ揃テ一躍シテ。繩ヲ踰ルヲ勝レリトス。  
 則チ上ノ褒賞ヲ得ルナリ。此競走ニ於テ。褒賞ヲ  
 得ル者ニ非サルヨリハ。帝ノ侍臣ニ列スルヲ得  
 サルナリ。  
 内裡ハ。神孫一系連續。遺胤ナリ。故ニ往時ハ。全  
 本國人之ヲ尊奉シテ神事セリ。此ノ如ク貴重セラ  
 ルヲ以テ。全國靜謐ナリ。十五百五十年ニ及テ。五  
 政弛解シ。内國争亂起レリ。其位ヲ退クノ後ニ於  
 テモ争亂止マス。全國血ヲ注ガサルナク。愈紛亂  
 シ。強ハ弱ヲ制シ。大ハ小ヲ襲テ。其領地ノ町村ヲ蹂



彌シ相吞噬シテ窮極ナク五十年間。全國血浴ニ  
アリ。

要

其状左ノ如シ。抑モ内裡ノ貴重ナルハ身日光  
ニ接セズ。足地ヲ踏マス。毛髮及爪ヲ截ルナシ。  
此通習慣ハ。數百年未然ル所ナリ。今ヲ距ルハ百十

八年前ニ二皇子アリ。第ハ舊慣ニ倣フテ。兵馬ノ  
權ヲ有シ。許多ノ亂黨ヲ鎮撫シ。諸侯ヲ制御ス。兄  
ハ父ノ崩スルノ後位ニ即クヲ望ムト。虽之ニ奉  
事スル者ナシ。其母后ニ子ヲ愛スルヨリ。兵馬ノ  
權ヲ分テ内裡ヲシテ。其一半ヲ領セシメシカ。為

亂黨

ニ三年毎ニ交代相有セシメントセリ。然ルニ第  
之ヲ甘受セス。三年ヲ過ケルモ。尚其權固守シテ  
兄ニ讓ラス。且竊カニ大諸侯ト議ヲ合シテ。大ニ  
勇威ヲ逞フセリ。是ニ於テ母后ハ一將ヲ撰ヒ。命  
ニ戻ルノ子ノ生命ヲ失ワシメテ謀曰リ。則チ久  
シカラスノ事ヲ成シカ。為ニ兵士ヲ招集セリ。  
是内裡ニ對スル亂黨ノ起源ナリ。既ニノ其子崩  
セリト。虽爭乱尚止マス。強者弱ヲ凌キ。相割據シ。  
王家ノ政令行ワレス。内裡ノ威權凋零シテ。日本  
全國終ニ將軍ノ手ニ歸セリ。新内裡ハ。將軍  
新帝ノ諸



歳入及威權ヲ自在ナラシムルニ關セス之ニ抗  
セリ終ニ内裡ハ撰擇シテ大將軍日本人之ヲ公  
方ト云フヲシテ將軍帝ヲ殺サシム此戰勝者ハ敗績  
人ノ悲歎スヘキ結局ヲ習學ハス又揮ヲ恣ニシ兵  
馬ノ全權ヲ握レリ

是ニ於テ戰爭復起リ大小侯伯分裂シ日本全國  
土崩瓦解ニ至レリ此事容易ニ静謐ニ歸セス何

トナレハ小侯伯互ニ利ヲ貪リ帝ニ甲國乙國ト争

フノミナラス各村各街皆掠奪ヲ事トスレハナ

リ敗北ノ者ハ損害ヲ蒙ルル一僅ヤナラス家屋

社寺更ニ乳児モ敢テ免カレナシ劍鎗以テ生

靈ヲ殺シ火力以テ家屋ヲ燒ク前日ノ大市モ忽

チ灰燼トナル

新公方ハ大ニ上進シテ終ニ將軍帝位ニ登レリ然レ

レ少時ニ過キス何トナレハ此時亂黨絶ユス公

方ノ軍勢ヲ依托スル所ノ三好殿ハ奈良ノ君ダ

ヨンドノト相誓約シ兩軍合セテ一萬二千致人ナ

ル一上ニ説クカ如シ此多勢京都ニ充滿セリ三

好殿ハ強勇ナル護兵ヲ伴テ市中ニ入り公方ニ

向テ格外ノ恩惠ヲ拜謝セントス蓋シカ竊カニ騷



動セスシテ之ヲ弒センカ為ニ京都近邊ノ寺院  
 ニ之ヲ請招シテ饗應セントス蓋シ陰ニ之ヲ弒  
 セントスルナリ然レモ公方此事ヲ偵知不則テ都下  
 ニ兵卒ヲ配置スルヲ以テ之ヲ悟ルナリ是ニ於  
 テ遁走ノ策ヲ施セリ四テ既ニノ途ニ就ク然レモ其  
 從者ノ不注意ナルヨリ忽テ喚戻サレリ  
 三好殿都下ニ入り宮殿ヲ襲フ其戰鬪スルノ前  
 ニ於テ一使ヲ公方ニ遣リ其言ニ曰ク君側ニ在  
 テ專横放肆ナル諸人ノ首級ヲ賜ハル一シ帝若  
 シ之ヲ領養セハ則安穩ニ速カニ我兵ヲ退ク一  
 シト而シテ使者ヨリ三好殿ノ死罪ニ處セント欲  
 スル諸人ノ名ヲ書中テ之ヲ記シ示セリ公方ノ近侍  
 人者此書ヲ請取り大ニ怒テ之ヲ裂キ走テ宮中ニ  
 入り公方ノ前ニ於テ懐劍ヲ拔キ自ラ腹ニ刺シ  
 膝下ニ倒レリ

此ノ如クニノ他ノ六人モ自裁セリ蓋シ他人ノ  
 来リ妨ケンヲ恐レテ戸ヲ鎖ツ然ルニ老侍臣ノ  
 子其父ノ血ニ塗ルヲ見テ走戶外ニ出テ敵兵  
 防キ或ハ之ヲ截リ或ハ之ヲ傷リ而シテ終ニ群人  
 中ニ死セリ



松本久成の軍  
多程の戦

然レ氏三好殿ハ火ヲ四方ニ放ワ公方自ラ謂ク  
燔死スルヨリハ寧コ闘死スルヲ勝レリトス則  
チ其母ノ支招スルニ拘ラス二百人ヲ率テ脱出  
シ各劍ヲ手ニス公方率先シテ進ム而ルニ久シ  
カラスノ頭及胸ニ三大創ヲ蒙ムリ地ニ倒レリ  
出血湧クカ如シ從者皆闘死シ積屍山ノ如シ其  
惨狀言フ可ラス此ノ如キ一他例ナキニアラス  
則チ往時ワルスフラーミンゲン舊時ノ希臘及  
羅旬記者ハ之ヲネルヒト名スノ勇戦是ナリ  
キリヤノカナル氏此事ヲ証言ス

ユリウス

ユリウスカールサル其一類例タリカール曾テ  
深林ヲ過キサムブレ河ヲ涉リ三萬ノ兵卒一隊  
ノ騎兵ヲ引テ安全ナル丘上ニ陣ヲ固メントス  
ルニ方テ中羅瑪人恐ルヘキ勇威ヲ張リ更ニア  
トロイス及フルマンドイスノ助勢スルアリ騎  
兵及射手前驅タリ此時サムブレ河水深サ三尺  
以テ烈シクホルヒノ騎兵ヲ攻ム戦鬪頗ル激シ  
口羅瑪人近接シテ放銃盛ナリネルヒ兵全軍力  
ヲ合セテ一方ヲ衝ク  
第一戦ニ於テ口羅瑪騎兵疾驅シテ追逐スカール



サル難澁迷惑シ。敗軍ノ徴ヲ見テ奮激突戰。第九  
隊及第十〇隊ヲ以テ左翼ヲ張テアトロイス兵  
ヲ破<sup>レ</sup>テ其サムブレノ方ニ退クヲ逐タレ。氏之  
ニ達スルヲ得スノ敗績セリ。又フルマンドイス  
兵ハ高所ヲ退テ川端<sup>岸</sup>ニ陣ヲ取<sup>張</sup>ル。則チ第十一隊  
ヲ以テ之ヲ破リ走ラセリ。

ネルヒ一兵ハ大将ボジユオグナチユスノ指揮  
ニテ。中<sup>羅瑪</sup>マノ陣ヲ襲フ。中<sup>羅瑪</sup>マノ高<sup>取</sup>食人ハ高  
丘上ニ在テヘルマンドイス人トアトロイセル  
ス人トサムブレ河ヲ越テ。何<sup>勝敗如何</sup>レカ折タルヤヲ偵

①

視セリ。既ニノ其敗ヲ見テ陣所ニ入り賊ヲ為ス。  
然レ氏歸ルニ及テ中<sup>羅瑪</sup>マ兵ノ丘上ニ陣取リス。  
ルヲ見テ皆四方ニ遁セリ。叫喚ノ聲天ニ達ス。  
トリール騎兵ハカーサルヲ助ケテ。中<sup>羅瑪</sup>マ陣所  
ノネルヒノ足下ニ在ルヲ見。又高<sup>取</sup>食人ノ取<sup>狼狽</sup>締<sup>シテ</sup>  
テ逃去ルヲ見テ。中<sup>羅瑪</sup>マ騎兵ヲ襲フニ輕装ヲ以  
テス。此事カーサルノ右翼ヲ以テ為スニ足レリ。  
則チ第十一隊ヲ以テ接逼スルカ故ニ之ヲ禦ク  
不能<sup>ワ</sup>ス。將校多クハ大小ノ創傷ヲ蒙ムレリ。彼  
此ニ於テ中<sup>羅瑪</sup>マ人之ヲ支フト。虽ネルヒ人ハ前



高橋の日記

及側ヨリ劇シク之ヲ襲ヘリ。

カーサルハ死ヲ決シテ一卒ヲシテ己ニノ軍装

ヲ脱去セシノ此時最モ激戦スル第一隊陣ニ走

リ入り名ヲ通シテ其將校ノ勇氣ヲ鼓舞シ更ニ

一戦ヲ試ミントス兵卒等ハカーサルノ現出ス

ルヲ見テ大ニ憤<sup>奮</sup>奮<sup>起</sup>スル所アリ且ツ第二隊ヲシ

テ輜重ヲ防護セシム副將ヲビニユスハ假兵

ヲ以テ虚勢ヲ張り全カヲ盡シテ耻辱ヲ一洗セ

ントス

ネルヒ<sup>兵</sup>復<sup>兵</sup>ク危険ヲ顧ミス大ニ奮勇激戦シ積

屍堆ヲ為スニ至レリ猛戦ノ事

公方ノ二百人勇戦ノ状亦此ノ如シ皆勇<sup>奮</sup>戦シテ

斃ル就中一少年アリ甫テ十四歳ナリ其勇猛敵

ヲ驚カスニ足ル則チ勇戦自ラ創傷ヲ蒙ルリテ

帝ノ斃ルヲ見テ悲歎シテ其屍ヲ注視シ叫<sup>喚</sup>テ曰

ク我君賊手ニ斃ル余<sup>臣</sup>豈ニ生ヲ盗マンヤ我事既

ニ終ル豈ニ誓ニ背カンヤト則チ劍ヲ擲テ懐劍

ヲ以テ頸ニ刺シ更ニ復タ心ヲ刺貫ス

敵軍火焰ノ及ハサル地ヲ選テ宮内ニ亂入シ帝<sup>公方</sup>

ノ母及女ヲ見テ残酷ニ之ヲ殺セリ唯僅カニ二

高橋の日記



人ハ竊カニ遁レテ宮殿外ノ一小舎ニ隠<sup>レ</sup>テ<sup>レ</sup>歎<sup>ル</sup>兵<sup>ノ</sup>ヲ<sup>リ</sup>  
 悉ク帝ノ<sup>公方</sup>貨財ヲ掠奪ス。近侍ノ嬪妾ハ多クハ貴  
 族ノ女ナリ。皆遁レテ火焰未タ及ハザルノ室ニ  
 群集シ。叫號啼哭ス。敵軍侵掠スルニ方テ。或ハ其  
 衣服ヲ禰キ。或ハ先ツ強<sup>姦</sup>シ。終ニ之ヲ截リ。或ハ  
 強<sup>姦</sup>スルノ後携<sup>テ</sup>去ルアリ。或ハ直クニ刺殺セ  
 ラルアリ。煙ニ窒スルアリ。火ニ入ルアリ。帝妃ハ  
 二三ノ侍女ヲ伴テ。寺院ニ遁タルニ。忽チ探知ス  
 ル所トナリ。亦不幸ノ終焉トナレリ。宮殿ハ灰燼  
 トナリ。滿宮ノ人或ハ刀死。或ハ燔死シ。免カル者  
 ナシ。三好殿帝及從者二百人ノ死ヲ見テ。宮<sup>後空</sup>即<sup>地</sup>  
 ニ一墓所ヲ設ケ。之ヲ埋葬セリ。更ニ火ヲ放テ。宮  
 殿屋舎ノ遺材ヲ盡ク灰燼ト為セリ。  
 衆僧來テ敵陣ニ請テ。公方ノ遺骸ヲ日本式ヲ以  
 テ其菩提所ニ改葬セリ。耶蘇教徒口デウエーキ  
 アロユス氏。日本カンガ島ニ在テ。千<sup>永</sup>五<sup>禄</sup>百<sup>八</sup>六<sup>年</sup>十五  
 年記スルノ書中ニ曰ク。帝ノ一親友アリ。此騷亂  
 ヲ聞テ。走<sup>馳</sup>テ京都ニ至リ。宮殿ノ遺跡ヲ見テ。亂妨  
 人ノ所業ヲ悲<sup>憤</sup>歎<sup>慄</sup>感<sup>慨</sup>シ。更ニ帝ノ<sup>公方</sup>墓所ニ詣リ。自  
 ラ割腹セリ。公方ト共ニ死シ。他地ニ於テ同生セ



シトスルノ意ヲ表スルナリ。

公方

帝ノ血族ニテ保生スルハ僅カニ二妹ト。二女ノ

ミナリニ妹ハ既ニ久シク身ヲ寺院ニ寄<sup>寓</sup>ナリ。尼

輩ニ混シテ深ク身ヲ隠セリ。故ニ幸ニノ探偵ヲ

免カレタリ。ニ女ハ尋常紳士ノ家ニ在テ隠レリ。

其外更ニカナドニユス御館アリ。先帝ノ季弟ナ

リ。戦<sup>闘</sup>ヲ避テ奔レリ。敵人之ヲ捕ヘテ僧トナシ。佛

事ヲ言マシメントセリ。然レ氏之ヲ肯ンセサル

ヲ以テ御館ヲ幽<sup>囚</sup>ス。終ニ之ヲ破テ口カレノ

城主ナルハ<sup>幡</sup>殿ニ身ヲ托セシ。上ニ記スル

カ如シ。

ハ<sup>幡</sup>殿ノハ諸候ヲ招集シ殊ニ信長ト合議シ。報

讐ヲ謀レリ。蓋シ御館ヲ奉シテ帝位ニ上ラシメ

ントスルナリ。木切ナル<sup>此</sup>企謀成<sup>サレ</sup>リ。何トナレハ

信長ハ六萬二千ノ兵ヲ率テ陣ニ臨ミ之ヲ四方

ニ配シテ御館ヲシテ望願ヲ達セシ。日本ヲ主

宰セシメントセリ。ハ<sup>幡</sup>殿ノ能ク其基礎ヲ定

ムト。虽事ヲ成就スルノ力ナシ。故ニ信長ヲ我手

中ニ置クナリ。

上ニ記スルカ如ク。乱黨ヲ退治スルノ後。先帝ノ



季第ハ位ニ上リ。ハ幡殿ハ大勢ヲ率テ。塚浦ニ  
 赴キ。信長ハ御館ヲ護シテ。京都ニ面マレリ。ハ幡殿  
殿ノ塚浦ニ在ル片大ニロデウエーキフロウス氏  
 ト親懇ヲ結ヘリ。是ニ於テ新帝公方及信長ニ媒介セ  
 ラレ。京都ニ於テ公ニ耶蘇教ヲ弘ムルヲ得タリ。  
 此事ヨリシテ。騒動僅ウナラス。有名ナル僧徒ニ  
 シオキシネスト。信長トノ間ニ議論ヲ生シ。日本  
 佛教徒。トロデウエーキフロウス氏トノ間。宗論嘯  
 ヲタリ。然レモニシオキシネスハ。魂魄死滅ノ證  
 ヲ示ス。能ワス。此嘲弄ヲ秘シテ。竊カニハ幡殿  
 ノニ向テ恨ヲ抱ケリ。ハ幡殿次ヲ重病ニ罹レ  
 リ。此虚際不都合ニ乘シテ。坊主信長ニ向テハ幡殿  
 ヲ讒ス。盖シ其言證據ナキニ非サルナリ。是ニ於  
 テ。信長ハ老友ヲ恨ム。アリ。ハ幡殿ノ全快スル  
 ニ及テ。大ニ之ヲ詰リ。其宮ヲ退去セシメテ。年々  
 収納ノ内ニ就テ。二萬ジユカトテ。ンヲ減額セリ。  
 無罪ノ人。曾テ恨ヲ抱ク。ノ坊主ノ為ニ。滿一年間。  
 大ニ嘲弄ヲ蒙ムレリ。  
 然レモ。後日。信長ト帝ト面謁スル。アルニ及テ。  
 固ヨリ疎意ナキ。判然タルヲ以テ。帝ニ奮額ニ



(五)

萬ジユカ一テシヲ復領スルノミナラス更ニ新  
 ニ一萬ジユカ一テシヲ増加スルヲ得タリ  
 但シハ<sup>ハ</sup>幡<sup>殿</sup>ドイ此大額ヲ受クルモ久シク之ヲ保  
 存スルヲ得ス不慮ノ一事件起ルニ由テ終ニ  
 之ヲ失セリ則ハ<sup>ハ</sup>幡<sup>殿</sup>ノ領地ノ境池田候ト境ヲ  
 接スル地ニニ城郭アリ池田候近傍城郭ノ通路  
 ニ碍アルヲ以テ之ヲ除カントヲ請フ聽カス之  
 ヲ請フヲ切ニノ終ニ暴慢ヲ加フ<sup>ハ</sup>幡<sup>殿</sup>ノ能ク  
 此暴慢ヲ忍フ蓋シ年々五百ジユカ一テシ<sup>ヲ</sup>余  
 ニ<sup>賜</sup>屬スルハ何ノ為ナルヤ<sup>田</sup>察スレハナリ池田  
 候猛兵ヲ以テ其一城ヲ襲フ城中ニダリウスタ  
 カヤ<sup>マ</sup>アリ直クニ事ヲ<sup>ハ</sup>幡<sup>殿</sup>ドイニ報ス此時ハ  
 タドノハ現今ノ職任ニテタカ<sup>ク</sup>キユムニ在リ  
 直クニ現在ノ兵ヲ引テ之ニ赴ク但シ之ヲ弄ス  
 ルニ二百ニ過キス更ニ其子ヲシテ五百ヲ率テ  
 廻カシム敵ハ短時ニ戦ヲ終ントスルノ意ナル  
 ヲ以テ多勢ヲ山後ニ隱シ小勢ヲ示シテ<sup>ハ</sup>幡<sup>殿</sup>ド  
 ヲニ向フ<sup>守</sup>城<sup>シ</sup>守リ防禦ヲ主トス<sup>一</sup>キ<sup>者</sup>兵モ共  
 ニ出テ戦ヒ為ニ偽計ニ陥レリ<sup>ハ</sup>幡<sup>殿</sup>ノ頭ニ  
 葡萄牙人ノ贈ル所ノ猩々緋ノ帽ヲ戴キ馬ヲ進



ノテ敵ニ接シ之ト戦フ既ニノ伏兵ニ囲マレ小  
勢ニテ一團トナリ激戦ス衆皆創傷ヲ蒙ルモ  
敢テ遁亡スル者ナシハ幡殿ノ子ノ援兵ヲ待  
フニ未ク至ラサルニ及テハ幡殿ノ子ノ終ニ國死セ  
リハ幡殿ノ子ハ之ヲ聞テ兵ヲ歸シテタカク  
キユイムニ潜ム

信長ト帝トノ間ニ不和起レリ一ハ謂ク帝タラ  
シムルハ我カカニ因ル所ナリト一ハ謂ク彼興  
復ノ効アリト虽自ラ日本ノ主タルニ非サルニ  
顧念セス高慢人ヲ凌ク余久シク之ヲ堪ユル能  
ハスト豆ニ不平ノ念アリテ其極大戦争ヲ起セ  
リ帝ハ勉テ軍勢ヲ募集シ信長ニ敵スルノ諸將  
ニ約シ誓テ彼ヲ制セントス信長去テ尾張ニ歸  
リタレ氏帝ノ用意盛ナルヲ聞キ衆ノ諫言ヲ容  
レス兵ヲ引キ驅テ京都ニ進メリ

使者ヲ帝ニ送り尚和平ヲ表ス然レ巨觸ル所火  
ヲ放チ兵ヲ弄セシム從來ノ百村千街總テ灰燼  
ニ附ス帝ハ構和ノ策ニ従ハス唯曾テ誓約シタ  
ル諸將ニ依頼シ愈信長ヲ挑ミ怒ラス是ニ於テ  
京都ニ入ルノ兵愈乱妨狼藉ナリ最モ上京ニ於



テ甚クシ。是貴<sup>紳</sup>ノ多ク住居スル所ナリ。屋宇崩潰ヲ免カレント<sup>欲</sup>スル者ニハ大金ヲ以テ之ヲ償<sup>贖</sup>ハシム。但シ全軍ニ令シテ下京ニハ兵士決シテ入ル<sup>ヲ</sup>勿ラシム。犯ス者ハ之ヲ重罪<sup>科課</sup>ニテ得<sup>得</sup>ル所ヲ以テ慰勞ノ科ニ供ス。

一夜中ニ於テ上京ノ殆ント三分ノ一ハ灰燼ト為レリ。翌日信長入京シ其残ル所ヲ焼ク。類<sup>延</sup>焼スル<sup>ル</sup>八千家ナリ。大寺院二十。小寺院八十ノ外阿彌陀釋迦ノ<sup>二</sup>大寺<sup>一</sup>ニ寺ナリ<sup>亦</sup>。共ニ鳥有トナル。

此焼失寺院中ニ一寺アリ六十僧ヲ養フ。京都ニ出テ勸化シ本堂再建ヲ謀ル。テマチニアルガルビユトナリ。

五

下京ハ一時無事ナリ。兵卒敢テ之ニ入ル者ナシ。是信長ノ全軍ニ令シテ之ニ入ルヲ禁シ。侵ス者ハ重罪ヲ<sup>科課</sup>スヘキヲ以テスレハナリ。然レ上

京ノ火勢漸ク延テ下京ニ及フ。是エシユム寺ノ在<sup>有</sup>ル所ナリ。坊主火勢ノエシユム像ニ及<sup>及</sup>シ<sup>シ</sup>ヲ心

配<sup>慮</sup>ス。抑モエシユムハ死者ノ靈ヲ苛責ノ地ニ導キ汚穢物ヲ焼キ棄ルニ及テ阿彌陀ノ設ケタル樂土ニ誘フナリ。此エシユムノ像ハ醜怪厭フヘ



シ。右手ニ三箇アル肉刺シヲ執ル坊主等火勢ノ  
狀像ニ及<sup>ハシ</sup>キヲ心配<sup>慮</sup>シ。圍ヲ取テ火勢此寺ニ  
及フヘキヤ。或ハ之ヲ安全ナル別地ニ移スヘキ  
マヲトスルニ示ス所ノ籤ニ曰ク。必ラス移遷セ  
サル可ラス否サレハ火ヲ遁ル可ラスト。衆僧大  
ニ騷動<sup>復</sup>シ。近街ノ人相助勢シテ。前ニ火ヲ免レタ  
ル上京ニ此像ヲ運ヘリ。然レモ信長全上京ヲ悉  
ク焼クニ方テ。此正シユム像モ灰燼トナレリ。而  
シテ其寺ハ信長下京ヲ焼カサルヲ以テノ故ニ却  
テ災ヲ免カレタリ。

信長公方之圖

然レモ<sup>公方</sup>帝ハ城内ニ籠居シテ。此ノ如キ亂暴ヲ傍<sup>坐</sup>  
觀シ。唯日々無事ニノ速カニ加勢ノ至ルヲ待テ  
宿怨ヲ散セントスルノ之。然ルニ信長ハ四方ヨ  
リ城ヲ圍ミ。迫テ講和シ。城ヲ引渡サシメ。且内裡  
ニ奏シテ。自ラ<sup>公方</sup>帝位ニ登ラント請フ。但シ此結約  
ノ箇條大ニ<sup>公方</sup>帝ヲシテ困難ナラシムルカ故ニ之  
ヲ固守スルヲ欲セス。愈援兵ノ到着ヲ企望ス。  
<sup>公方</sup>帝ハ此不忠忘恩ノ人ヲ嫌ドセス。信長ハ勝ニ衆  
シテ<sup>公方</sup>帝御館ヲ捕ヘテ。速カニ日本冠ヲ戴カント  
ス。卑馬<sup>危</sup>以テ勝報ヲ四方ニ告テ。三十<sup>日</sup>ヲ招ク。實

信長公方之圖



二千九百七十三年ナリ。然レ此未夕帝位ニ登ラ  
スシテ躊躇ス衆王怒テ服従セス何トナレハ誓  
約書中所領地ヲ自意ニ任セテ恣ニ廢置シ且高  
慢ニシテ自ラ佛ニ托シテ帝冠ヲ我肖像ニ置キ  
ジユボ村ニ一寺ヲ建築スルノ前ニ既ニ説リカ  
如クナレハナリ。

此諸件ノ外尚更ニ衆怨ヲ引ク所以アリ蓋シ坊  
主ヲ重役ニ服セシムルナリ帝御館ノ生命ニ於  
テモ尚然リ曾テ二惡僧アリ大ニ此事ヲ進擧セ  
シム柳モ<sup>比叡山</sup>ノヤマハ極テ高峻ナリ京都ノ東

ニ時行程ニアリ今ヲ距ル一八百年前日本國王  
大ニ佛ヲ信スルヨリ終ニ千八百寺院ヲ此地ニ  
建設セリ各寺僧房アリ世事ニ關係セス專ラ學  
事ニ勉強ス諸民牛馬ヲ以テ遠地ヨリ諸要品ヲ  
運輸ス但<sup>然ルニ</sup>少許ノ音聲モ勤學ノ妨碍トナル  
キヲ以テ<sup>比叡山</sup>ノ麓ニ二村ヲ開ク上坂本  
下坂本是ナリ之ヨリ諸食料及日用必需品ヲ供  
セシム又近江國歲貢三分ノ一ヲ<sup>寺所</sup>用ニ給ス此  
収納年々次第ニ増多ス何トナレハ王子或ハ其  
貴族ノ人多ク此寺ニ寄寓スルニ由ルナリ總計



頗ル莫大ナリ。故ニ威權日ニ加ハリ。京都ノ裁判政務ハ坊主ノ關係スル所タルニ至ル。凡ソ佛教ニ關スル諸可否皆決テ之ニ取り學者僧トナルニハ皆之ニ頼ル。

星霜ヲ經歷スルト殊ニ戦争ノ為ニ曾テ比叡山ヤマ頂上十五ヶ所ニ散在セル多教ノ寺院次第ニ減シ終ニ八百ニ至リ又坊主ノ行状モ隨テ放肆トナリ破戒淫酒醜聲汚行制度限ナシ或ハ佛經ヲ典シ兵器ヲ購ヒ鬪争ニ從事スルノミナラス更ニ山盜賊トナリ行人ノ貨財ヲ掠奪スルニ至ル

又内裡ノ許可ヲ得ルニ非スノ日本全國ニ募金シ千五百三十五年ニハ京都ヲ侵襲シ全市ヲ燒キ人ヲ殺シ乳児ヲモ免サハルニ至レリ。此ノ如キ惡業固ヨリ處刑免カル可キニアラス。後三十年ニノ終テ潰崩セリ。何トナレハ信長トネシ。一ニ王トノ間ニ大ニ戦争起リタル中僧徒ネシ。一ニ王ニ加擔シ固執シテ信長進軍ノ路ヲ塞ク。信長怒テ多員ノ僧ヲ射且之ヲ磔刑ニ為シタリ。信長此ノ如キ血浴ニモ足レリトセス多勢ヲ率ヒ更ニ新兵ヲ加工助ケテフレノヤマニ向ヘ進



坊主之ヲ防クニ力足ラサルヲ以テ屈伏シ使  
者ヲ送り巨額ノ金ヲ捧テ歎願スル所アリ信長  
怒テ之ヲ聽カス尚兵ヲ進ム彼此ノ<sup>比叡山</sup>ヤマ  
ニ在ル寺院ハ數百年來衆庶ノ信仰スル所ニ  
土地ノ安全ヲ守護スル所ナリトテ大ニ佛徳ヲ  
賞賛スレト信長之ニ答テ曰ク余豈ニ金ヲ捧ケ  
シムル為ナランヤ又<sup>諸</sup>各佛ノ笑フヘキ妄言ヲ信  
スル者ナランヤ唯坊主ノ抗拒セシヲ復讐スル  
ノミ是天ノ許サレル所ナレハナリト  
後信長護身ノ為ニ<sup>比叡山</sup>ヤマノ頂上ニ有名ナ

ル阿彌陀ノ子ナル觀音ヲ安置スル為ニ一ノ美  
麗ナル寺院ヲ建立ス此像ニハ三十臂及三十手  
アリ面貌美少年ノ如シ胸上ニ七個ノ人首ヲ掛  
ク每手ニ矢ヲ握ル金冠ニハ寶石ヲ飾装ス日本  
人諸國ヨリ群集參詣シ<sup>此像</sup>觀音ヲ禮拜ス蓋シ其擁  
護スル所ニ由テ慶福ヲ受ケ長壽ヲ保クシ<sup>誇張</sup>テ  
祈ルナリ坊主ハ年々大祭ヲ執行シテ<sup>此</sup>尊信ス此  
時日本全國ヨリ群集スルノ人員ハセルシユス  
モ思ハサル所ナルヘシ又アベ<sup>波野</sup>ージユスノ礁印  
ノ燈火ニテ百萬以上ノ<sup>波野</sup>シア人ヲ數フト云



フモ之ニ及ハサルベシ又テモルラク土耳真帝  
バヤセトニ向テ四十萬ノ韃靼騎兵六十萬ノ歩  
兵ヲ指揮セシアルモ亦之ニ及ハサルベシ此  
祭事ハ行装極テ美クナリ大坂ニテモ觀音堂及  
ヒ像ヲ設ク然レモ全ク其状ヲ異ニス抑モ同一  
佛ヲ各地ニ於テ各様ニ製スルハ日本人ノ習慣  
風ナリ

信長ハ坊主ノ請ヲ所ニ闢セス前記ノ山上觀音  
堂ノ周圍ニ曾テ抗拒セシ諸人ヲ招集シ上下ノ  
坂本ニ村ニ火ヲ放テ兵卒ヲ山上ニ進ノ更ニ四  
方ニ配置シテ一僧ヲモ遁亡スルヲ能ワサラシ  
ム僧徒力ヲ盡シテ防禦スルモ攻撃盛強ナルカ  
為ニ或ハ疲勞シ或ハ遁亡シ壁ノ一隅守ヲ失セ  
リ敵兵之ニ乘シテ殺傷甚ナシ兵火延テ觀音堂  
ニ及フ比叡山ヤマヨリ遁亡スル者アルモ尚殺  
戮ヲ免カレス是信長諸道ニ注目シ之ヲ制スレ  
ハナリ或ハ恰モ野獸ノ如ク峻山幽谷ヲ跋渉シ  
一時殺戮ヲ免カルモ終ニ餓餓ノ為ニ斃ル信長  
尚以テ飽クトセス  
更ニ火ヲ放テ四百以上ノ寺院ヲ燒ク之ニ附屬



五

五

スル堂宇及<sup>此</sup>敵山ヤ<sup>此</sup>觀音堂皆災ニ罹レリ火  
 焰天ヲ衝ク猶カイサルネ<sup>此</sup>ノ暴行ノ活圖ヲ見  
 ルカ如シ是三百年前デサノネスロ<sup>此</sup>ノシ之ヲ  
 焼クノ後此市街二回具側<sup>近侍史</sup>用人ノ為ニ放火セラ  
 レタル所ナリ此時火焰<sup>消滅セサ</sup>雨連スル<sup>此</sup>六日七夜ナ  
 リ寺院堂宇及貴重ナル記念碑モ皆崩潰セリネ  
<sup>羅理</sup>マ帝位ニ登リ當時ノサト称ス暴行多シ  
 トロエ<sup>此</sup>一<sup>此</sup>シ<sup>此</sup>ス<sup>此</sup>カ<sup>此</sup>如<sup>此</sup>キ<sup>此</sup>ハ<sup>此</sup>悲哀スヘキノ一  
 詩料トナレリ<sup>此</sup>敵山ノ状亦<sup>想像</sup>推察スヘシ多  
 數ノ寺院及堂宇ハ七百年前ノ建築ニノ多クハ  
<sup>王</sup>家ノ寄附スル所皆巨額ヲ費ヤシ之ヲ堆積セ  
 ハ天ニ達スヘキ者ナルモ皆烏有ニ歸セリ其災  
 ハ千五百七十一年八月二十八日ナリ  
 此ノ如キ所業ノ後信長京都ニ入ル之ヲ距ル<sup>一</sup>  
 十五里ニ有名ナル僧徒クキユノウチサミド<sup>一</sup>  
 アリ釋迦ノ一宗派ヲ唱フ之カ為ニ妻ヲ棄テ髮  
 髭ヲ除去スル<sup>一</sup>尋常式ニ據ル学徒隨從スル者  
 四百人私金ヲ以<sup>素</sup>テ一美寺ヲ建ツ人民隨喜スル  
 者多シ此ノ如キヲ以テ頗ル放肆ナリ<sup>公方</sup>帝御館  
 為ニ大ニ尾張候信長ヲ制セント謀ル落書シテ



曰ク信長ハ實ニ極位ニ昇レリ。猶梨子ノ囊中ニ在ルカ如シ。豈ニ久シキヲ保タンヤ。速カニ潰爛スヘキナリ。密ニ之ヲ信長ニ示ス者アリ。信長烏ソ之ヲ恐ハン。忽チ大ニ怒ル。則洛外ニ於テウチサミドノヲ捕ヒ責ムルニ誹謗スルヲ以テシテ。終ニ寸斷セリ。此ノ如クスルモ。尚未夕熱心ヲ消スルニ足ラス。既ニ放棄シタル妻子ヲモ。夫父ノ罪ノ為ニ累連シテ。廢刑ニ歸セリ。其新築ノ寺院及堂宇ヲ燒クモ。尚未夕快心ナラストス。後久ヲシテ信長。又有名ナル大學校ハキユサン

ギンニ注目セリ。是六百年来坊主ノ連綿トシ。榮耀ヲ極ムル所ナリ。此學校ニハ。各種ノ寺院アリ。千人ヲ養フ。壯大盛昌ナリ。從來屬スル所ナシ。信長之ヲ亡サントスルノ意アリ。其機會ヲ待ツ。偶一二ノ山賊アリ。尾張ニ於テ竊盜シ去テハキユサンギン寺ニ隱ル。此時ニ棄シテ之ヲ攻ントスルニ。僧徒ノ援勢頗ル廣キヲ以テ。俄カニ着手スルヲ得ス。之カ廢置ヲ熟考ス。既ニノ卒然トシ之ヲ襲ヒ。衆僧ヲ降伏セシメ。寺院ヲ燒キタリ。則千

五百七十三年ナリ。是ニ於テ全國皆信長ノ威風



ニ靡ケリ

然レハ全國抗抵スル者全クナキニアラス。則チ  
 日本人大ニ尊奉スル所ノ僧徒アリ。意ニ隨ハス。  
 甲斐國ニ信玄アリ。最モ佛ヲ信仰ス。此人曾テ其  
 父ヲ放逐シ。又其兄ヲ幽囚セリ。此ニ回ノ暴行ニ  
 因テ大ニ其名ヲ汚セリ。故ニ自ラ此汚名ヲ雪ク  
 ク所以ヲ以テ索メサルヲ得ス。是ニ於テ佛門ニ  
 入り。髮髭ヲ剃去シ。佛家ノ式ニ據リ。更ニ勤行シ。  
 日々六百僧ヲ供養ス。是大ニ名譽ヲ釣ル所以ナ  
 リ。日本ニテハ諸侯ニシテ日々三回拜佛シ。且寺  
 院ノ為ニ盡カスル者。他ニ比ナキ所ナリ。是ヲ以  
 テ衰敗セル佛教ヲ再興スルノ名噴々タリ。故ニ  
 諸國ニテ隨喜渴仰スル者多シ。就中近來ヲ口ニ  
 比敵アマ山ノ燒失セル寺院ヲ再建シ。又有名ナル  
 寺院觀音堂ヲ再建スルヲ以テ大ニ世ノ稱スル  
 所トナル。此事各人ノ耳ニ徹スル所ナリ。何トナ  
 レハ比敵口ニオアマハ。元來大學校ニノ全國ノ大  
 學者集會シ。生徒ヲ涵養シ之ヲ全國四方ニ派出  
 スル所ナレハナリ。抑モ觀音堂ハ年々無數ノ信  
 者參詣スル所ナレハ其寄附スル所頗金類ル莫大ナ



リ人々争ヒ傳ヘテ。此事ヲ佛ヲ信スル人ニ相吹  
聽シテ各助勢スル所アリ。  
各地各方ヨリ信者群集セリ。信長之ヲ喜ハス。此  
時信長ハ日本全國ヲ領スレハナリ。就中信玄ヨ  
リ信長ニ書ヲ寄テ記名スルニタシシ  
工沙門信玄トス。蓋シ王國及佛國庶民ノ大主宰  
信玄トノ意ナリ。信長ハ則チ之ニ答フルニダイ  
ノキウテシノ<sup>魔</sup>ホシ信長ト云フヲ以テス。蓋シ  
魔ノ王及昏迷ナル精神ノ主宰タル信長トノ意  
ナリ。以テ之ヲ嘲ルナリ。

信玄ノ外ニ明智アリ。一將軍ナリ。京都血ノ森。此  
事アリシヨリ以名起レリ。ニ於テ信長ヲ弑シ。更  
ニ乱暴蹂躪スルノ後。其妻子ヲモ滅盡セリ。  
信長ノ臣ニ一將アリ。羽柴ト名ク。此人後ニ<sup>將軍</sup>帝位  
ニ登リ。一時大職ニ當レリ。此羽柴ノ名ハ<sup>翼</sup>曾テ信  
長ノ賜フ所ナリ。曾テ命ヲ奉シ。兵ヲ率テ天草ヲ  
制スル。片其用意既ニ備ハリ。將ニ途ニ就カント  
スルニ方テ新名ヲ請フ。信長需ニ應シテ。從來稱  
スル所ノ藤吉郎ヲ改メテ。羽柴トス。蓋シ森ノ上  
ノ羽毛ノ義ナリ。抑モ天草候ハ森ト稱ス。故ニ今



羽柴ト云フハ新將軍ノ韃ク敵ヲ制服スル一猶  
鳥ノ林上ニ飛フカ如シト云フ意ニテ此其成期行ヲ祝  
スルナリ

羽柴ハ始メ藤吉郎ト称ス卑賤ニ生ル少時一田農  
舎人ノ奴タリ其近傍山林ニ入テ木ヲ伐リ薪ヲ

拾フヲ以テ職トス山路險阻ニノ頗ル困苦ス且

日々所要少ナカラス大ニ之ヲ給スルニ慍ム偶

一日非常ノ大量ヲ要セリ藤吉郎苦役ニ堪エス

巧ニ少許ノ焚杖ヲ以テ高度ノ熱ヲ得タリ家主

其怜悯ナルニ驚キ意中竊カニ謂ク此童僅尋常奴

隸ニアラス之ヲ軍事ニ使用セハ必ラス大ニ為

ス所アルヘシト若干ノ路費ヲ與テ去テ京都ニ

赴幸仕ヲ求メカシム

京都ニ至リ一商家ニ雇ハル

藤吉郎大ニ喜テ京都ニ至リ一商家ニ雇ハル後

轉シテ一紳士ノ家ニ事フ主人信長ノ親友ナリ

屢相往來ス曾テ一日兩人同シク獵ス藤吉郎從

フ一美鷹アリ偶誤テ喬木ノ枝ニ懸リ其絆索足

ニ纏リテ脱スルヲ得ス鷹匠等百方構思スレテ

之ヲ救フ所以ヲ知ラス徒ラニ樹上ヲ眺ムルノ

ミ主人藤吉ニ命シテ樹上ニ攀ケシム其登攀ス



ルノ輕捷ナルヲ信長及從者ノ大ニ驚讚スル所  
タリ

是ヨリ後信長ニ隨從シ漸次高位ニ登レルナリ

抑モ信長ノ之ヲ登庸スル多般ノ功アルニ由ル

曾テ城郭ノ破損毀傷セルヲ修理スルニ方テ大ニ信

長ノ賞ヲ得タリ同寮之ヲ嫉ム競馬以テ其技ヲ

試ミ耻辱ヲ共ニト謀リシニ又敗ヲ取レリ偶一

機會アリ同寮以テ彼ヲ退クヘキノ時トス則公

家從來藏所園ヲ一寶刀ヲ藏ス偶遺失シテ所在ヲ知ラ

ス衆口曉々皆藤吉郎ヲ疑フ一友人アリ説テ一

時城外ニ出テ衆言ヲ避ケシム是事却テ油ヲ火

ニ投スルカ如ク此隱遁ヨリ愈他ノ疑念ヲ固結

シ藤吉郎ヲ盜ト称セサル者ナシ是ニ於テ冤名

遁ルヘキナシ為ス所ヲ知ラス藤吉四方ニ奔走

シテ金銀職工ニ就テ百方之ヲ探偵ス久ヲシテ

一賈ノ其鐔ヲ所持スルヲ見ル是ヨリ溯テ終ニ

賊ヲ認ムルヲ得タリ藤吉ノ喜知ルヘシ則テ事

ヲ廳ニ聞ス前日ノ讒者ハ日本式ニ據テ刑ニ處

セラル而シテ證據分明ナルヲ以テ藤吉ヲシテ賊

ヲ截ラシム藤吉則テ賊首ト寶刀トヲ併セ捧



是<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>無根ノ誹謗消滅セリ。此事昇級ノ一階トナレリ。  
 藤吉曾テ一地ノ宰タリ事ヲ斷スル敏捷敢テ停  
 滞セス。又敢テ邊幅ヲ饒ラス。世人大ニ之ヲ賞讚  
 ス。則チ高位ニ登ルノ漸ナリ。曾テ長濱城乱<sup>黨</sup>坊人  
 ノ為<sup>ニ</sup>困<sup>ル</sup>日々他ノ為<sup>ニ</sup>侵セレ。信長大ニ悩  
 ム。城<sup>將</sup>殆<sup>ト</sup>陥ラントス。防拒ノ策殆<sup>ト</sup>盡ク。公  
 謂ラク藤吉ニ非サレハ能ワスト。遽カニ之ヲ招  
 テ。譏ス。衆長陣<sup>籠</sup>ヲ期ス。然ルニ新將軍来ルニ及テ  
 数日ナラスシテ敵ヲ退散セシナリ。  
 後ニ天草軍ニ於テ大功アリ。信長ノ驚ク所ナリ。

信長京都ニ於テ弑サルニ及テ。日本兵馬ノ權終  
 ニ其手ニ歸セリ。其始信長ノ季子三歳児ヲ奉シ  
 テ。之ヲ補佐<sup>翼</sup>シ。以テ根基ヲ固クセリ。信長三子ア  
 リ。伯ハ父ト共ニ戦死シ。仲ハ痴ナリ。故ニ季ヲ奉  
 スルナリ。

信長ノ親戚ニ柴田アリ。尚存生ス。大ニ藤吉郎ノ  
 企謀ニ抗拒ス。藤吉其居城ヲ重圍ス。之ヲ防クノ  
 策窮ス。則チ城中ノ衆ヲ招キ集メ告テ曰ク。藤吉  
 郎ノ手ニ落サルニ方テ余自裁セントス。余死セ  
 ハ。速カニ此體ヲ焼キ。無理非道人ノ手ニ觸レシ



亡ルヲ勿レ。汝衆宜シク遁レテ其生命ヲ保存セヨ  
 ト然レト衆敢テ之ヲ聽カス皆共ニ死セント欲  
 スト云フ。柴田殿大ニ其厚意ヲ感謝シ。訣別ノ宴  
 ヲ張リ珍膳美肴筵ニ滿テ。唱歌舞躍競ヒ起ル。絲  
 竹管絃以テ耳口ヲ飽カシム。盤上酒茶意ニ任セ  
 テ飲マシム。宴終ルノ後薪炭焚找ヲ堆積シ。火ヲ  
 放ツ。火焰忽チ颯ル。是ニ於テ柴田殿先ツ妻子侍  
 妾宮女ヲ捕ヒ自ラ刀ヲ揮テ。或ハ腹ヲ刺シ。或ハ  
 胸ヲ貫キ。或ハ寸斷ス。此ノ如キ暴行ハ侍臣亦其  
 妻子ニ施ス所ナリ。而ノ屍ヲ火中ニ投ス。後自ラ  
 腹ヲ割キ其上ニ倒レリ。藤吉郎城内火起ルヲ見  
 テ始ハ偶然火ヲ失スルナリトシ。此時ニ衆シテ  
 之ヲ侵スニ其門其壁敢テ之ヲ支フル者ナシ。進  
 テ城内ニ入ルニ屍体縱横ナリ其景况恰モサハ  
 キユシキユス。舊時ノ圖ヲ見ルカ如シ。  
 アニンバル三方ヨリ之ヲ襲フ。殊ニ廊下ニ近キ  
 依壁ニ向テストロムラムノ道。城ヲ打崩スヲ施  
 コシ迫ル。城兵ハ歎テ眼下ニ見テ大ニ殺戮ヲ恣  
 ニス。アニンバル誤テ自ラ鎗ニテ腿ヲ傷ク。依テ  
 退カサルヲ得ス。衆未テ之ヲ助ケ治ヲ慶シ。速カ



サギユンテ

ニ愈ルヲ得タリ。戦争復タ愈<sup>更</sup>劇シ。日々一萬五千ノ兵ヲ以テ交攻ム。サギユンテ一ネルス。諸方ヲ防カサル可ラス。敵兵ストロムヲム<sup>レ</sup>テ以テ諸所ヲ攻メ。終ニ壁ヲ潰崩ス。三<sup>塔</sup>共ニ毀ル。市街彼此裸露セリ。アニバル全軍ヲ以テ之ヲ攻ム。サギユンテ一ネルス。破壁ノ間ニ在リ。方ニ死地ニ陥ルヲ以テ奮激突戦シテ却テ大勝利ヲ得タリ。アニバルハ曾テウシク勝ヲ得ルヲ以テ既ニ此地ヲ押領セリト假想シタルニサギユンテ一ネルス。毀タル壁ノ市街ニ壯者ヲ置キ敵兵ヲ驅逐セサレハ敢テ一步ヲモ退カスト決意シ戦フ。一愈劇シク矢ヲ放ツ。一頗ル盛ナルカ為ニ敵兵大ニ悩メリ。

強兵

サギユンテ一ネルス。施ス所ノ矢ハ粗ナル布ニテ巻キ。溼青ヲ塗ルナリ。火ヲ放ツヘシ。凡ソ觸ル所皆貫ク。楯ヲ穿ツヲ以テ兵士楯ノ焼ルヲ防<sup>恐</sup>ク。一<sup>小</sup>之ヲ棄サルヲ得ス。故ニ皆裸體トナル。此番頗ル切<sup>持</sup>アリ。アニバル退テ別策ヲ議ス。兩軍相<sup>持</sup>テ戦ハス。但シ城兵ハ日夜破壁ヲ修理スルニ従事ス。既ニノ復タ一戦ヲ開ク。蓋シアニ

運轉



ニバル兵卒ニ慰勞金ヲ與ヘ自ラ壁ニ接近セル  
 運轉スヘキ擡上ニ在テ兵ヲ指揮シ壁ヲ越テ銃  
 ヲ放チ石ヲ投ス是ヨリ勇氣ヲ奮起ス又亞弗利  
 加人五名ヲシテ地ヲ堀リ壁ヲ穿タシメタルニ  
 此事極テ容易ナリシ何トナレハ其壁ハ石灰ニ  
 テ製スル所ニアラス數百年前ニ泥ニテ石ヲ墾  
 スルニ過キカルヲ以テ忽チ破毀シ得ハ  
 ナリ是ヨリカルタギニール大ニ市中ニ侵入セ  
 リ然レニ城兵ハ市街ヲ中截シ破毀セル家屋ニテ  
 一新郭ヲ造リ以テ再ヒ敵兵ヲ防ケリ此ノ如キ  
 重圍ヲ受クルヲ八月ニ及ヘルヲ以テ要具漸ク  
 缺乏シ増シ遠隔セル<sup>四維瑪</sup>下接兵ヲ俟ツノ念日  
 々減ス而ノ敵兵侵撃尚止マスマンニバルハ軍  
 勢ノ一部ナルオレタトネルス及カルベタトネ  
 ルスノ潰崩セントスルヲ恐ルト虽マハルバル  
 コミルユウスノ子ハ一帶ノ兵ヲ引テ戦ヲ挑ミ  
 三所ノ壁ヲ奪ヘリ之ヨリ兵ヲ進ノ一方ヲ占有  
 セリ以テ謀テアンニバルト和ヲ講セシム敵將  
 之ヲ肯セサリシニ西班牙人アロルキユス懇請



此の如く  
亦火の如く

ニ由リ。ア。ニ。バル。ハ。金銀及賫寶ヲ贈ラハ退去  
シテ其指示スル他國ニ赴ク。キヲサギユンデ  
トネル。ス。ニ約セリ。此講和ニ由テアロルキユス  
ハ壁ノ建築ヲ廢止セリ。衆吏會議ス。人民好奇ノ  
念ヨリ争テ茲ニ群集ス。評議ノ主タルヘキ者致  
人其議事ニ答ル。ル。ナク。逃亡シテ行ク所ヲ知  
ラス。諸貨賤ヲ市上ニ堆積シ。火ヲ放テ之ヲ焼ク。  
是ニ於テ再ヒ混亂ヲ起セリ。又ストロムラムノ  
ンヲ以テ塔ヲ打崩スルニ及テ城内啼哭ノ聲湧  
クカ如シ。亞弗利加勢壁ヲ穿テ全城裸露スルヲ

此の如く  
亦火の如く

以テ衆皆市街ニ避ク。アンニバル。此報ヲ得テ數  
千人ヲ引テ速カニ城内ニ入レリ。然レ氏紳士ハ  
屋ニ火ヲ放テ妻子ヲ燔死セシメテ曰ク尚アン  
ニバルノ劍ニ觸レテ死スルニ勝ル所アリト。  
藤吉郎此時柴田殿ノ焼城ニ於テサギユンチユ  
スノ實地ヲ歴觀スルノ想ヲ為セリ。次テ京都ニ  
凱歸セリ。初名藤吉郎後弟ニ名羽柴。是信長ヨリ  
賜フ所ニノ少時間之ヲ用ヒタルニ今之ヲ廢シ  
テ關白殿ト称ス。蓋シ日本ノ大公ノ意ナリ。後千  
五百八十二年太閤様ト称ス。則チ日本大帝ノ意



ナリ。

今既ニ日本全國ヲ押領スト。尚其争亂アラ  
ン。一ヲ恐ル。則チ大ニ有功ノ將士ヲ賞スルモ。我身  
卑賤ヨリ出ル所ナルヲ以テ。他ヲ心服セシムル  
一能ワス今之ヲシテハナリ。其異心ナカラシムルニハ。他  
事ニ托シテ。衆ヲ使役スルニ若カスト之ヲ熟考  
スルノ後。太閤様方ニ厭忌スルノ諸候ヲシテ。遠  
征セシムルニ決意セリ。

隣國高麗ニ事アラントス。此半島ハ分テ八道ト  
ス。則チ京畿道キョウキョウホーシホーシキアキアギユギユエシエシシウシウンン

六

ロキングシヤンカンゴイングカオキウリ及ビ  
ンガン是ナリ。此地北ハ韃靼領ニウセニ接シ。南  
ハヒユンゲマ島ニ隣ル。西ハガロ海ニノ。他ハ朝  
鮮海ナリ。又那人之ヲカオシト稱ス。長サ二百  
七十獨ヒ里幅三十里京畿道キョウキョウ道道ニ首府ピンギヤ  
ングアリ。全國人口多シ。市街多クハ四角ナリ。家  
屋建築ノ法。支那式ニ據ル。衣装服言語文字教法及  
政法總テ全クユレールスニ倣フ。是怪シムニ足  
ラス。二百年前ニハ支那帝ヒアオヒユスニ附屬  
シタレハナリ。



魂魄萬物ニ移遷轉スルトノ説ハ高麗此國ニテモ唱ル  
 所ナリ其屍體ハ之ヲ柩ニ納メ大ニ之ヲ装飾シ  
 三年ニ始テ之ヲ土中ニ埋葬スルナリ屍ノ臭  
 腐爛ヲ防クニ朱ヲ以テス高麗婦人ハ隨意ニ他行  
 シ男子ニ接ス處女ハ親戚及兩親ノ見及ハサル  
 所ニテ秘カニ情郎ニ密會シ或ハ恣ニ縁組結スル  
 トアリ土地ハ富饒ナリ年々米ヲ収獲スル一二  
 回ニ及フ又好紙及朱ヲ産ス此朱ハ支那人及日  
 本人以テ漆ニ和シ家具器ヲ塗ル所ナリ  
 高麗ハ屢他國人ノ侵掠ヲ蒙ムレリ近二十七年

前支那ノ軍將マオヘンリユング氏韃靼人ノ亂  
 ヲ避テ此地ニ至リ軍人ヲ各地ニ散亂シテ隙ヲ  
 伺ヒ徒虚ニ乘シテ大ニ土人ヲ悩マセリ土人此亂  
 妨徒ヲ防クノ策ナク終ニ救ヲ韃人ニ請フ韃人之  
 ヲ諾シ多兵ヲ送り土人ヲ前導トナシ大ニマオ  
 ヘンリユングノ兵ヲ欺ケリマオヘンリユング  
 ハ前進ノ兵ヲ見テ我味方ノ勢ナリト做シ油斷  
 シタルニ忽チ不意ニ侵撃ヲ蒙ムレリ為ニ陣ヲ  
 張ルニ及ハスシテ敗績セリ但シ此戦争尚全必勝  
 ト云フヘキニアラス韃人大ニ之ヲ破ルト虽彼



那兵敵  
決ミテ隊ヲ亂スニアラス直チニ海岸ニ向テ多  
勢ヲ舟載シテ他ニ走リクレハナリ故ニ全勝ニ  
アラス殊ニ此ノ戦争ニ巧ナル猛將ヲ遁走セシ  
メタレハナリ彼亦高麗人ノ所業ヲ慄トセス早  
晩之ヲ報ヒント謀レリ

韃靼ニ近接シテ北方ニ四ヶ國アリ共ニ侵掠ス  
ル所トナル高麗王ハ韃人ノ首府ピングヤング  
ヲ襲フニ方テ之ヲ防クノ策ヲ設ケリ則チ其兵  
ノ通過スヘキ峽道ニ兵ヲ備ヘテ韃兵之ヲ過ク  
ルニ方テ大ニ之ヲ討ツ高麗人勝ニ衆シテ大ニ

之ヲ尾撃シ將ニ全勝ヲ得ントスルニ方テ忽然  
トノマオヘンリユング大ニ鼓騷シ来リ韃兵ノ  
背後ヲ襲フ韃兵四方ヲ顧ミルニ皆山ナリ進ム  
ヲ得ス前面ニハ高麗人アリ後面ニハ支那人ア  
リ急迫道ルヘキナシ既ニ其死ヲ決スルカ為  
ニ大ニ勇ヲ奮テ激戦スルモ終ニ勝ヲ得ス支那  
人ニ破ラレ止ムヲ得ス王國ニウセニ向テ脱走  
セリ是ニ於テ兵ヲ集ムルヲ五萬ナリ支那人及  
高麗人モ未タ以テ寧意ナルヲ能ワス支那人ハ  
九萬ノ兵ヲ養ヒ高麗人ハ七萬ノ兵ヲ備ヒ遁セ



本島大  
天正十一年  
二

セル韓人ヲ逐フノ策ヲ議ス。

千五百九十一年太閤様此半島ヲ日本人ノ戦場

ト為セリ蓋シ身卑賤ニ出ルヲ以テ諸候ヲ制服

スルニ難ク或ハ謀ルトアルヘキヲ慮リ遠征以

テ勇氣ヲ蔑泄センカ為ニ此戦ヲ開キシナリ謂

ラク高麗ヲ服從セハ内國安寧ナラシムヘシト

此ノ如キ大事件ヲ輕易ニ看做シ遠隔ナル高麗

ヲ膝下ニ属セントシ十分ノ兵ヲ送レリ此時平

日モ厭フ所ノ諸候ヲシテ此役ニ從事セシノ

リ其勢六萬ナリ既ニ日本勢高麗ニ至リタル

ニ頗ル多事難敢テ容易ニ成功スヘキニアラス長

陣ナラサルヲ得ヌ太閤様屢書ヲ寄セ新兵ヲ増

シ送ル諸將士久時外役ニ在テ妻子ニ面接セス

敵地ニ在テ快々日ヲ消シ厭嫌帰志アレバ許可

ヲ得サルヲ以テ尚滞在ス。

既ニ兵ヲ高麗ニ送ラントスルニ方テ太閤様尚

大ニ勞カスルヲアリ其始書ヲ召衆人ベリフベシ

ノ首長ニ寄ス此人ハ西班牙王ノ命ニテマニル

リアニ在函スル所ナリカ西班牙人ノ此

島ヲ創見セシハ千五百六十四年ニアリ之ヲ領

言



スルニ大ニ勞セサリシナリ。蓋シ此地先ニハ支  
那ニ屬シ。後ニ無規則ニ不羈トナレハナリ。此島  
ノ富饒ナルカ故ニ其領分ニ非サルモ尚又那人  
ノ來テ貿易スル所ナリ。年々二十船内外ニ及フ。  
綿絹陶器硫黄鉄銅麥粉水銀ダトレン。彈藥麻布  
ヲ以テ鹿及他ノ獸皮麝香ニトカワテニ換ル  
ナリ。

太閤様ノ書中ヲ寄テニ曰ク。日本ハ連年内亂アリタレ  
ル。今方ニ静謐ニナリ。諸侯割據分裂セシ者。始テ  
一帝ニ歸セリ。此事十年以内ニ成功スル所ナリ。

今間暇ヲ得タルヲ以テ。是ヨリ支那ニ着手セン  
トス。貴國若シ我命ヲ奉セハ。我兵決シテ汝カ地  
ヲ侵掠スルヲナク。厚意ヲ謝スヘシ。若シ否サレ  
ハ。後日大ニ蹂躪スルニ至ルヘシ。請フ之ヲ撰ラ  
ベヨ。

呂宋ビリワベリネレ主長。此書ヲ得テ大ニ惑フ。彼固  
ヨリ太閤様ノ勇力威權ヲ知ル。今此ノ二條ノ問  
題ヲ解サカ濟サシニハ。丁寧ニ答ヘサル可ラスト。此時  
不注意ニリユビユスデリアノニ命シテ。送り遣  
リ曰ク。ビリワベリ呂宋ネレ主長ハ。太閤様ノ此書ヲ得



テ熟考スルニ是日本帝ノ手ヨリ出タルニ非サ  
 ルヘシ其文意ヲ以テ知ルヘシ殊ニ長崎ニ在ル  
 イソイテンウシモ此事ヲ申シ送ラス是輩ハ日  
 本事件ヲ引受ヘキ者ナリト然レモアントウエル  
 プノイソイトヨルネリスハサルトノ其帝國事  
 件ニ關係スルカ如クナラス自ラ別アリイソイ  
 テン何ニ由テ悉ク日本秘事ヲ知ラ之ヲ其國友  
 ニ報知スルヲ得ンヤ是ニ於テ一ノカネチア  
 ーネンヲ薩摩ニ送り嚴ニイソイテンヲ苛責シ  
 之ヲ大隈様ノ聽ニ入ラシメリ何ニ由テイソイ

テニ帝國ノ制法ニ及シテ事ヲ執ルヲアランヤ  
 唯日本人ヲ教化シテキリスト教ヲ信仰セシム  
 ル為ニスルノミ豈ニ正シキ國法ヲ租界ニシ且  
 終ニ歐羅巴人民ノ國政ニ関スルカ如キアア  
 シム可ンヤ  
 大隈様重テ嚴責ノ書ヲビリウベリネンニ寄タ  
 リ其船漂流シテ達セス然レモ此報知アルニ由  
 テ弟ニノ使節ヲ送レリ其長ハベトトルユンサ  
 レスニノ四人ヲ伴フアヲシスカネルモンニツ  
 キナリバルドロノウスリユイスラフランシユス



キスデサンコトミカレレ。ベートルハブチスタ  
 及ヒゴンサレスカルクア是ナリ。此輩元十百九  
 十三年ニ太閤様ニ謁セリ。此時進物莫大ナリ。帝  
 之ヲ嘉納シ。同宗人ノ如クニ京都外ニ於テ寺院  
 ヲ建設スルヲ許セリ。基督教法ヲ弘メサル一キ  
 約ニテ。其年ニ於テ一寺ヲ築キマリアアハンボ  
 ルチユキユラヲ奉尊ス。然ルニ此約ニ關セス。口  
 羅瑪マセ教法ヲ大ニ日本ニ宣化セリ。是ニ於テ困  
 難事件起レリ。則チ救援ヲマニルラニ求ム。速カ  
 ニアラニシスカネルスアウキユスチニコスロ

ドリキユエスマルセリユスリバデネーフ及ヒ  
 ロネーミユスダイシユニ就テ。呂宋國王  
 國王ノ書及進物ヲ太閤様ニ捧ケリ。進物ハ嘉納  
 サレタレ。臣書ハ意ヲ達スルヲ得サリシ。何トナ  
 レハ返書中ニ答意ノ語アラサレハナリ。ベートル  
 ルハブチスタ尚僧徒ニ命シ其教法ヲ擴張シ。京  
 都第一寺ノ外更ニ大阪ニテ第二寺ベテレーム  
 長崎ニ第三寺ヲ築カシム。是大阪在留ノ二僧ニ  
 ートルハブチスタ及ヒロネーミユスダイシ  
 ヲ大阪ノ氣候ニ堪ヘサルヲ以テ撰生スルカ為



聖二貴人マコト  
信ス

ニ轉移地スルナリ。長崎市外ニ旅舎ニ就テ日々市  
民群集シ。說法ヲ聞ク。

ジダキエスコンノイハ日本ノ一貴人ニ近接スル  
ヲ得タリ。此人ハ從來羅馬ハセ教法ヲ信仰ス

ル所ニテ。殊ニ京都周圍ノ地方ニテ大ニ之ヲ唱  
フ。終ニ最モ貴位威權アル人ノ兄弟ヲ教化シ

釋教徒ノ需ニ應シテ基督ノ教法ヲ説クヲ主  
務トス。太閤様亦呂宋人ベリネヨリ送りタル

此僧ノ日本地方ニ居留スルヲ默許セリ。之カ為  
ニ年々大利ヲ得ルナリ。抑モ高麗島ニハボノニ

ト名クル磁陶器ヲ産ス。原價極テ賤ナリ。然ルニ日  
本人ハ大ニ之ヲ黄金視シテ。茶事ニ使用スルニ

最モ適當ナリトスル所ナリ。此茶事ハ日本貴人  
ノ慰ニテ之カ為ニ別室ヲ造リ。貴人自ラ手ヲ下

シテ。客ヲ饗應スル所ナリ。  
太閤様。此時ニ使ヲ呂宋人ニ送り所在

ノ磁陶器ヲ悉ク購求セシメ。果ノ高價ナルヤヲ試  
シカ為ナリ。之ヲ購求スル人マニルリア市中ニ

於テ日本ノ基督徒教名。此磁陶器ヲ求テ。日  
本ニ送り。大金利ヲ得ントスル者アルヲ見ル。太閤

陶器磁陶



様此事ヲ知り悉ク之ヲ捕一ヲ刎頸シ其器ヲ没  
収シ再後之ヲ高ノ者ハ刑ニ蒙ス一キヲ公告ス  
商人死<sup>ニ就</sup>ヲ免<sup>ク</sup>カル者<sup>カラス</sup>ウナ  
然レ臣太同様高麗ニ事アラントスルノ前ニ於  
テ自<sup>生</sup>子ナキカ故ニ甥ヲ養テ職ヲ讓ラントス則  
チ長子ニ五ヶ國<sup>ヲ</sup>次子ニ<sup>〇</sup>京都近傍ニテ  
三ヶ國<sup>ヲ</sup>季子ニ<sup>〇</sup>ニヶ國ヲ共ノ十五ヶ國  
ヲ以テ自己及執政ノ用ニ供ス他ノ諸國ハ侍臣  
將士及ヒ親戚ニ分割配共シ約スルニ年々若干  
ノ税ヲ納レシム大國ヲ領スルノ諸侯ニハ更ニ

貨賂ヲ賜フ之ヲ籠絡シ敢テ容易ニ頭ヲ擡ケサ  
ラシノ且ツ常ニ賂實ト生命トヲ失フ一アル一  
キノ危懼ノ念ヲ抱カシム  
諸事方ニ整頓ス抑モ高麗軍事ヲ起スノ大主意  
ハ強猛ナル將士ヲ失スルカ或ハ否ラサルモ外  
役ニ從事セシムレハ國內ニテ事ヲ企ツル者勿  
ルヘク又幸ニ高麗ヲ押領スル一ヲ得ハ其新  
収地ヲ以テ舊地ニ交換シ日本全國總テ一手ニ  
歸<sup>ベシ</sup>キヲ以テナリ  
且ツ此企謀ニ背ク者勿ラシムル為<sup>〇</sup>外貌ヲ饒



高麗  
送

ルニ世事ヲ厭フヲ以テ自ラ職ヲ辭シ其甥ヲシ  
テ之ニ代ラシム之ヲ關白殿ト稱ス甫テ二十五  
歳ナリ固ヨリ虚名ナルノミ詐謀ニ出ル所ナリ  
太閤様果ノ職ヲ退クニアラス甥ハ其名ヲ得ル  
モ實ヲ得ルニアラス

然レモ一候モ敢テ太閤様ニ向テ何故ニ尚國事  
ニ當リ尚職ヲ退カス諸事ヲ擔當スルヤヲ詰問  
スル者ナシ是ニ於テ断然意ヲ決シ高麗ニ向テ  
先ヅ日本兵ヲ船送スルヲ六萬次テ更ニ十四萬  
ヲ以テス此兵高麗ニ着岸シ直チニ諸方ニ散亂

ス既ニノ全國ノ多分就中首府ビシクヤング日  
本ノ手ニ屬セリ然レモ未タ全勝ヲ得タルニア  
ラス何トナレハ支那人大ニ援兵ヲ送り助ケタ  
レハナリ六年ヲ經テ未タ結局ニ至リタルニア  
ラサレモ和ヲ講シテ僅カニ一萬二千人ヲ遺存  
シ他ハ皆日本ニ歸陣セリ但シ日本ノ利ニハア  
ラサルナリ則チ高麗ハ永ク支那帝國ニ屬スヘ  
キヲ日本人永久之ヲ侵掠スルヲ勿ルヘキヲ  
結約シ高麗軍事始テ局ヲ結ヒタリ抑モ太閤様  
ハ之カ為ニ消費スル所ノ貨賤及人員幾許ナル



ヲ知ラス。兵卒ヲ失スル。十萬以上ナル。シ。而  
ノ其甥ナル。關白殿ハ。此休戦前。一二年ニ於テ。死<sup>亮</sup>  
セリ。

此自裁セル。故關白殿ハ。稟賦銳敏ナリ。然レ氏性  
須殘忍ナルヲ以テ。終ニ寶藏ニ當ル<sup>任</sup>。ヲ得サリ  
シ。平日殺戮ヲ以テ。無限ノ快樂事トナシ。日々定  
時ニ罪人ヲ自<sup>自</sup>刑ス。之カ爲ニ園中ニ一地ヲ設  
ク。四方囲ムニ壁<sup>垣</sup>ヲ以テス。地上沙ヲ敷<sup>キ</sup>。中間一  
臺ヲ置<sup>設</sup>ク。則チ罪人ヲ之ニ置キ。或ハ卧シ。或ハ立  
ツ。皆命ニ從ハシム。關白殿自ラ手ヲ下シテ。或ハ

四肢ヲ截リ。或ハ之ヲ標<sup>準</sup>トナシ<sup>テ</sup>。失ヲ射。或ハ銃  
ヲ放ツ。或ハ妊婦ノ腹ヲ剖キ。ネロノ第二世ノ如  
ク。造化ノ秘奧ヲ探ル。爲ニ胎児ヲ剖キタリ。其殘  
忍酷薄ナル。比ナシ。今數百年間。殘忍人ノ所業  
ヲ掲載シテ。世人ヲシテ。其狀ヲ追想セシメシト

ス。  
往昔無理非道ナル。バラリス。ハペリルユスノ  
爲ニ。一鍬牛ヲ鑄タリ。火ヲ以テ之ヲ燔キタルニ  
在內ノ泣聲ハ。牛吼ニ變セリ。アトレウス氏ノ所  
業同シク。殘酷ナリ。則チテ。ステス。ニ其子ノ肉



ヲ煮テ食セシメリナユルリアハ驚駭セル馬ヲ  
 驅テ殺戮セル父王セルヒウス氏ヲ蹂躪セシメ  
 タルハ誰カ之ヲ厭惡<sup>忌</sup>セサラニヤ此惡業ヲ絶セ  
 シ所ノ市街今尚惡逆街ノ名ヲ遺スアンチバテ  
 ス氏ハ獅子ノ齒ヲ以テユレースセス氏ノ船ヨ  
 リ一水夫ヲ裂カシメタリ豈ニ殘酷ナラスヤハ  
 ニニバルノ妻ハ尤モ惡ムシ此人地ヲ掘テ一  
 池ヲ造リ之ニ滿ル<sup>盈</sup>ニ人血ヲ以テス嗚乎是豈ニ  
 快樂慰事ナランヤアウギユスチユス曾テ歎シ  
 シテ曰ク寧ロ一口ヲスノ豚ヲ養フテ子ト為ス

ヲ勝レリト思フト蓋シ其父變性シクルヲ以テ  
 三惡児ヲ助命シタレハナリ羅馬ノ執政一ジウ  
 スホルリオハ<sup>釋教</sup>悲田派ニ於テ厭惡ス一キ名アリ  
 多人ノ買奴ヲ刺シ殺シ其血ヲ池ニ貯一此人血  
 ニ汚レタルラムプレート<sup>魚名</sup>ヲ美味ナリト  
 トシテ賞翫セリ又ヒテルリウスノ所業ハ人類  
 ニ非サルナリ齋敗セル屍體ヲ頓着ナシニ踏ミ  
 且曰ク敗死ノ敵兵ニハ佳音アリト從者ハ敗走  
 セル敵兵ノ臭氣ニ由テ皆發嘔スル所ナリ<sup>ネ口</sup>  
 ハ殘忍苛酷出来損シノ極ト云一シ其母ネ口ノ



命<sup>ニ</sup>所<sup>セテ</sup>ニ<sup>テ</sup>。懐劍ヲ胸ニ中テ臨終ノ語ニ曰ク  
妾今此出来損シナルネ口ヲ妊孕シ且産出シタ  
ルノ腹ヲ割クト。

葡萄牙王カロベ<sup>ー</sup>セス氏亦此黨ナリ曾テ其兄  
第十ルスノルミス<sup>ル</sup>ヲ殺セリ蓋シ其妻トハ血族  
ノ昏嫁ナリト誤想シ之ニ及ヒタルナリ而メ之  
ヲ奪テ己ノ妻トナシ其妊孕スルニ方テ之ヲ刺  
殺セリ是スノルジス<sup>ル</sup>ノ初胤ヲ孕メリトスルナ  
リ又プレキサス<sup>ニス</sup>氏其子カムベ<sup>ー</sup>セスニ<sup>向</sup>  
テ胸ヲ開キ矢表ニ立テ直テニ心ヲ射サシメノ夕

ル片カムベ<sup>ー</sup>セス父ニ<sup>同</sup>テ嘲笑シテ曰ク  
キサス<sup>ニス</sup>ハ<sup>ハ</sup>酩酊スルヲ以テ王ヲ咎ム余既ニ  
醉ヘル然レモ<sup>ハ</sup>豈ニ射損スル<sup>ト</sup>アラシヤト

ノ<sup>イ</sup>デ<sup>ン</sup>王<sup>ア</sup>ステ<sup>ー</sup>ア<sup>ゲ</sup>ス<sup>ル</sup>重<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>非<sup>道</sup>殆<sup>シ</sup>ト<sup>之</sup>  
ニ劣<sup>ラ</sup>ス<sup>其</sup>曩<sup>ニ</sup>ペ<sup>ル</sup>シ<sup>ヤ</sup>候<sup>カ</sup>ム<sup>ベ</sup>ー<sup>セ</sup>ス<sup>ニ</sup>配<sup>ス</sup>  
セ<sup>リ</sup>方<sup>ニ</sup>孕<sup>ノ</sup>リ<sup>王</sup>一<sup>夜</sup>夢<sup>ニ</sup>其<sup>子</sup>出<sup>産</sup>シ<sup>成</sup>育<sup>ス</sup>  
ル<sup>ニ</sup>及<sup>テ</sup>全<sup>亞</sup>細<sup>亞</sup>ヲ<sup>領</sup>スト<sup>覺</sup>テ<sup>後</sup>大<sup>ニ</sup>恐<sup>ル</sup>是  
ニ<sup>於</sup>テ<sup>妊</sup>婦<sup>ヲ</sup>割<sup>キ</sup>胎<sup>児</sup>ヲ<sup>見</sup>ント<sup>シ</sup>ハ<sup>ル</sup>バ<sup>ギ</sup>ユ  
ス<sup>ニ</sup>命<sup>ス</sup>ハ<sup>ル</sup>バ<sup>ギ</sup>ユ<sup>ス</sup>命<sup>ヲ</sup>奉<sup>セ</sup>ス<sup>竊</sup>カ<sup>ニ</sup>其<sup>子</sup>  
ヲ<sup>女</sup>王<sup>ミ</sup>ト<sup>ブ</sup>ラ<sup>ダ</sup>テ<sup>ス</sup>ニ<sup>依</sup>托<sup>ス</sup>偶<sup>我</sup>カ<sup>家</sup>婦<sup>一</sup>



死胎ヲ産スルアリ。依テ密カニ更換シテ。創傷ニ  
 テ分明ナラサラシメ。之ヲアステイアゲスニ捧  
 ケリ。王以テ安心セリ。然レ<sub>レ</sub>後ニ於テ王悟ル<sub>リ</sub>所  
 大ニハルバギユス<sub>レ</sub>ヲ怨ミ。則テ其兒體ヲ調  
 理シテ。食膳ニ供シ之ヲ食セシメ。膳ヲ徹スルニ  
 及テ兒ノ頭及手ヲ示シ親戚ノ肉ニテ飽タルヲ  
 悟ラシメリ。  
 カユスカリギユ<sub>ラ</sub>亦此血犬ニ弄セサルヲ得ス。  
 此人營ニ他人ニ向テ。悲道残酷ナルノミナラス  
 更ニ其兄弟チ<sub>ニ</sub>リウ<sub>ス</sub>ヲ毒殺シ。三妹ニ<sub>テ</sub>淫シ

或<sub>ハ</sub>饑饉ニ苦シマシムル為ニ羅馬國ニ穀物ヲ  
 輸送スルヲ禁止ス。又<sub>ハ</sub>地震雷鳴洪水及敗軍  
 ヲ企望ス。蓋シ已レノ在位ノ日ニ於テ。非常ニ難  
 渋セシノ名ヲ後世ニ留メ<sub>ン</sub>カ<sub>ニ</sub>為ナリ。  
 カ<sub>ラ</sub>カ<sub>ル</sub>ラ<sub>ハ</sub>亦残酷ノ名ヲ蒙ル<sub>レ</sub>シ。則チ其母  
 ノ首ヲ得<sub>ン</sub>カ<sub>ニ</sub>為ニ羅馬領ニ進入シ。兄弟ヲ殺セ  
 リ。而ルニ其母ハ僅カニ損傷シタレ<sub>レ</sub>。後此緄子  
 ナル残酷ナルカラカル<sub>ラ</sub>ニ結婚セリ。  
 ボカス<sub>レ</sub>ノ卑賤ニ出タルト<sub>ラ</sub>キ<sub>ーン</sub>ヨリ受タル  
 耻辱ハ數百年ヲ經ルモ消滅スル<sub>レ</sub>勿ル<sub>レ</sub>シ。此



人軍兵一組ノ長ニ進ミタル一揆ヲ起シマウ  
 リキウス帝ニ背キ自ラ<sup>公理</sup>ロシタシキノル  
 内ノ一地ヲ押領ス頗ル無理非道ノ辱置アリマ  
 ウリキウス帝ヲ柱ニ縛シ帝妃ニ強好シ其子ヲ  
 殺シ自裁セシメサリシ而ノボカスハ七年ノ間  
<sup>公理</sup>コシタシキノル王位ニ在リ後<sup>神</sup>佛罰ヲ受  
 テボンウスノ為ニ宮内ニテ四肢及陰部ヲ截ラ  
 レ遺骸ハ熾熱ノ銅鍋ニテ焼カレタリ  
 ノシトセルビスエツパハワト氏亦之ニ類スル殘  
 忍所業アリ則チ九百十四年ニ獨ニ國大饑饉ア

リ貧民必死ノ苦ナルヲ以テ市街ニ徘徊シ食ヲ  
 索ムハワト氏大ナル假屋ヲ建テ貧民ヲ悉ク此  
 内ニ入レ他行セシメス嚴ニ食物ヲ禁シ戸ヲ鎖  
 シ四方ヨリ火ヲ放テ之ヲ焼ク火焰ハ<sup>叫喚</sup>蹄果ノ聲  
 ト共ニ天ニ達スハワト氏暴怒之ヲ叱シテ曰ク  
 鼠輩叫フヲ止メヨ汝等徒ラニ穀物ヲ貪食スル  
 カ為ニ生活スルニ非サルヘシトビンゲンニ接  
 シテ列應河畔ニ浴テ今尚鼠塔ノ遺跡アリハワ  
 ト氏<sup>暴君</sup>佛敵タルヲ永ク後世ニ示スニ足ルナリ  
 凡ソ婦女ハ其性男子ヨリハ<sup>柔順</sup>穏順ナリト虽必ラ



スシモ概論ス一カヲ<sup>ス</sup>サ<sup>ル</sup>所アリ。或ハ變性シテ  
 残酷ノ所業ヲ為ス者アリ。今日本人ニ副テ併セ  
 テ之ヲ掲載スヘシ。  
 ロンゴバルデンノアルボイシ王ハゲボーデン  
 ニ屬スル旗持ナルギユニモンドヲ戦陣ニテ追  
 ヒ散セリ而ノ勝ニ乘シテ其女ロセモンドヲ奪  
 テ結婚セントス。女ハ父ノ讐タルヲ以テ大ニ夫  
 ヲ怨ム。蓋シ其夫食膳ニキユニモンドノ鬪鬪ヲ  
 以テ酒ヲ飲ミタルヲ<sup>見</sup>テ愈之ヲ厭<sup>フ</sup>ハ<sup>テ</sup>リ。ヤ<sup>ロ</sup>ン  
 コバルドノ一美黨アリ。ヘルミギルトト云フ。ロ

セモンドノ側<sup>侍</sup>女中ノ一人ニ懸想セリ。亘ニ言ヒ  
 合セテ夜中某ノ時ニ於テ相密會セント約セリ。  
 ロセモンド之ヲ偵知シ之ヲ窺フヘルミギルド  
 痴情盛ナルカ為ニアルボイシノ卧床ニ於テ<sup>姦</sup>  
 淫セリ。ロセモンド則チ之ヲ發覺シ大ニ怒リ終  
 ニ迫テアルボイシ王ヲ<sup>害</sup>セ<sup>ン</sup>トテ托ス。ヘルミギ  
 ルド窮迫止ムヲ得ス。王ヲ害シ此惡業ヲ為スノ  
 後ロセモンドト共ニ逃亡シ二人ヲヘンネニ至  
 レリ。然レモ亦共ニ非業ナル結果ヲ免カルニ非  
 ス。蓋シヘルミギエルドハロセモンドノ為ニ毒



藥ヲ飲サレタルヲ悟リ。則チ瓶中ノ残液ヲ。彼ニ  
 吞マシノ。共ニ毒死ヲ免カレサレハナリ。  
 べルシヤニテハセーリユルデミンテレノ母バ  
 リサケスハ暴行アリ。誰カ之ヲ驚カサランヤ。曾  
 テメサバテスヲ生ナカラ皮ヲ剥キ十字架ニ張  
 リ裸層ヲ日光ニ晒シ乾カシタリ。又一人ヲ刑臺  
 上ニ置ク。十日間轉回スルノ後。目ヲ刺シ耳ニ  
 熔鉛液ヲ注キタリ。又一人ヲ斜ノニ二艘ノ小舟  
 ノ間ニ挟ミ。頭ト脚トヲ出サシノ。三週間蜂蜜ト  
 牛乳トノミヲ以テ養クノ後腐敗シテ蛆虫ヲ生

スルニ至ラシノリ。又ニユミユリシンチスハ。韃  
 韃女王ナリ。致百年ノ憤怒ヲ漏スト云フ一シ。此  
 人活人ヲ中斷スルヲ以テ快樂トシ。又老人ニ強  
 テ其子ノ肉ヲ食セシノリ。  
 ナベリウス。亦アウキユスチユスニ劣ラサルノ  
 暴名アリ。曾テ罪人ヲ海中高峻ナル岩礁上ニ在  
 ラシノ。倒レテ海ニ落レハ。則揖舵ニテ打殺セシ  
 ノリ。又其罪人ノ眼前ニ於テ其小児ヲ戮シタリ。  
 又或ハ罪人ノ陰莖ヲ緊縛シテ。漏尿セサラシノ  
 之ニ強テ酒ヲ飲マシノ。尿意窘迫シテ。萬苦中徐



々ニ死ニ至ラシメタリ。

チベリウス王ノ歷代中ニ母殺シアリネロト名

ス。屢怒テ口自ラ之ヲ言フ。嗚乎余豈ニ羅馬領ノ

零落ヲ望ム者ナランヤ大幸ナルブリアミユス

ヨトロヲイハスハ灰ヲ眼中ニ撒セリ彼終ニ此

ノ如キ昏迷ナル樂ヲ爲シ而ノ羅馬ノ周圍ニ火

ヲ放ツ然レモキリステネニ命シテ火災ヲ

防カシメ又其首ヲ截リ或ハ野獸皮ヲ以テ包ミ

犬ニ噬マシメ或ハ番瀝青ヲ衣ニ注キ夜之ヲ燭

ニ代フ

又トリエリトニ於テタセシチウスニ施コ

ス所非常ノ残酷ト云ヘシ其後マクリニユス羅

瑪ニ施ス所亦然リ則チ活人ノ手ニ死者ノ手ヲ縛

シ臭氣ト蛆蟲トノ爲ニ徐々ニ死ニ至ラシムル

ナリ又エレイセ無理非道人バシタレオンハ衆

人ヲ豪置スルト如何ナリシヤ曾テ使者アリ他

ヨリ至ル其歸ラントスルニ方テ熾熱ノ鍊柑子

ニテ胸肉ヲ挟ミ截リ強テ之ヲ食セシメントセ

リ

公祖丁ニル帝バシリウス亦之ニ似



カキキリシヤ

タルアリ。曾テビユルグアーレン敗兵一萬五千  
人ノ目ヲ盲ト為シ。僅カニ数人ノ目ヲ存シ。群盲  
ヲ誘シテ各家ニ歸ラシム。是敵ニ對スルノ象置  
ナリ。然レモ是ヨリカキキリシヤシテ更ニ極テ残酷ナル象置  
ヲカルクギーネカキキリシヤテ倣ハシメタリ。羅馬ノ  
軍將アケリウスノ眼瞼ヲ截リ。太陽ニ向ハシム。  
光線ノ刺戟ニ堪ヘス。苦痛ノ為ニ徐々ニ死ニ就  
ケリ。

カキキリシヤ  
カキキリシヤ  
カキキリシヤ

然レモ近世ノ二例ヲ掲ク。ゲラルドマンスー  
ドダラーノ残酷ナルハ。誰カ之ヲ避ケ嫌ハサ

カキキリシヤ

ランヤ。是シツテニバク寺院ニ於テ。基督教徒僧  
ヲ焙リ殺セリ。蓋シフレデレフキノーシセマル  
クトガラーフヲ假寓セシメタルノ罪ヲ責ルナ  
リ。又誰カノウエルカルラカキキリシヤノ暴行ヲ驚カサラ  
ンヤ。則チ其親友ウイルカキキリシヤハスカリゲル。及其二  
子ヲ残酷ニ殺戮シタリ。是暴惡ヲ以テカキキリシヤハ  
ヒセシセカキキリシヤヲバゲユアカキキリシヤニ歸セシカ為ナリ。此惡逆  
ナル所業ニテ二國容易ニ裁ニ歸シ。君主ナシカ  
ルカキキリシヤハ邊疆廣大トナルニ隨テ。名望ヲ好ムノ  
念愈残酷ニ變シタリ。則チヒセシセカキキリシヤニ於テ一貴



女ニ懸想ス其惡業ヲ嫌テ之ヲ肯セス依テ怒テ  
少女ヲ打擲シ翌日之ヲ寸斷シ以テ其父ニ附ス  
父之ヲ勿擲茶執政ニ達ス則チ其暴行ヲ領知ス  
ルヲ以テカルルヲ防クノ策ヲ講シバジユア  
ヲ重圍シ遂ニ之ヲ殺シ併セテ其ニ子ヲラニス  
及ウトルヘムヲ殺シ隨テ其領地ヲ奪ヘリ

關白殿ノ殘忍ナル自ラ手ヲ下シテ人ヲ殺スヲ  
以テ歡樂トスルニ至レリ然レモ神罰墮ヲ回ラ  
サスシテ次テ至レリ其伯父太閤様職ヲ讓リ五  
ヶ國ヲ贈寄セシニ此ノ如キ恩惠モ久シカラス  
ノ死ヲ賜ヘリ其原由抑モ多般ナリ何トナレハ  
關白殿ハ日本全國ヲ領知スヘキノ名アリテ實  
ナク伯父太閤様尚之ヲ掌握スレハナリ幼主ノ  
執政及朋友類ニ之ヲ教唆名アリテ實ナキハ唯嘲  
弄スルニ過キストシ昏冥不明ニメ太閤様ノ所業ヲ  
透視スルヲ能ワス高麗戰爭ニ方テ出陣セシメ



高麗光武  
及子孫

ントスルハ。或ハ闘死<sup>セシム</sup>ルカ。或ハ多年異域ニ在  
ラシノントスルナリ。殊ニ太閤様ハ。自ラ退<sup>逸</sup>テ關  
白殿ヲシテ。高麗ヲ討タシメ。終ニ日本軍ヲ支那  
ニ向ハシメ。自ラ帝位<sup>職</sup>ヲ占ントスルナリトス。然  
ルニ高麗戰<sup>報</sup>争意ノ如キヲ得スノ終リ。關白殿ノ  
出陣ヲ要セス。然レモ此時ヨリ伯父<sup>ニ對シテ</sup>ノ間キ意  
恨ヲ抱キ解ケサリシ。  
更ニ不平ノ意ヲ増加スル<sup>ト</sup>起レリ。太閤様ニハ  
從來子ナク。父タル<sup>ト</sup>ヲ得サル<sup>一</sup>シトセシニ。老  
年ニ及テ。不意ニ一子ヲ攀ケリ。其誕生ヲ祝シテ。



